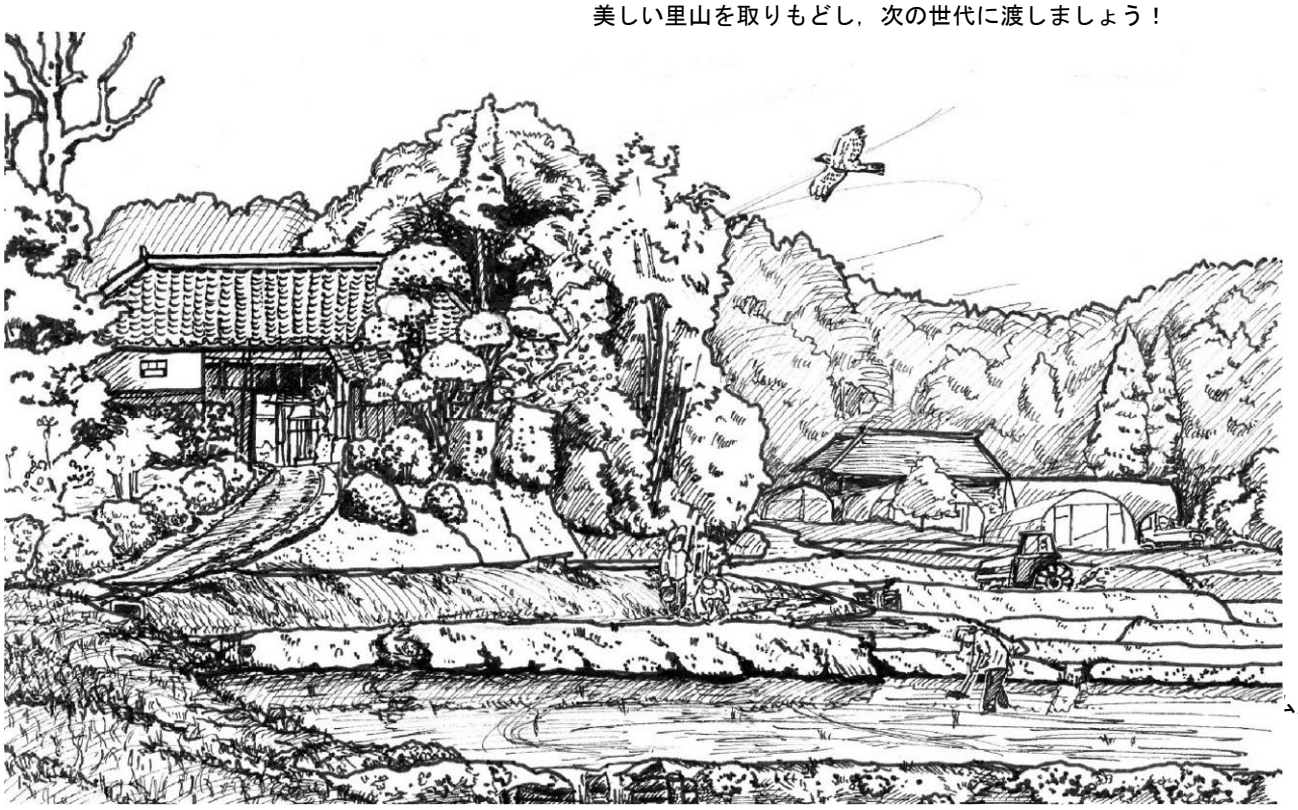
第２回 ちば里山フェスティバル「里山シンポジウム」報告書

里山に託す私たちの未来

2005 年テーマ

里山と子ども

先人の豊かな経験を，子どもとその親たちにも伝え，
美しい里山を取りもどし，次の世代に渡しましょう！



里山とは……

自然と調和・共存する人々の生活に育まれた森林・草地から水田や畑，川沼，水辺，そして集落を含む人と自然と文化とが一体となった空間です．この里山は，自然と人との共存の場であり，現在および未来の人々にとっては大きな価値を有します．

千葉県では，里山の保全・再生と活用を目指し 2003 年５月に「里山条例」を施行しました．その趣旨をしっかりと各地の現場に根付かせるためには，行政をはじめ農家，市民・NPO，研究者等が互いに力を合わせた息の長い取り組みが求められます．

主 催：里山シンポジウム実行委員会・我孫子市・
　　ちば里山センター・(社)千葉県緑化推進委員会・千葉県
後援 ：千葉市

里山シンポジウム実行委員会（2005）

代表　　金親 博榮
副代表　　小西 由希子、栗原 裕治

第１分科会「里山と水田・稲作」
代表：渡邉 英二　　委員：田崎 愛知郎、荒尾 稔、岡田哲郎、相馬由起子

第２分科会「里山と生物・ビオトープ」
代表：田中 正彦　　副代表：網代 春男　　記録：高山 邦明　　委員：平沼 勝男、高山 翔、高山 瑞紀、江澤 千春
越川 重治、南川 忠男

第３分科会 「里山と教育・学習」
代表：上善 峰男　　副代表：鈴木 敦　　記録：岩橋 幹夫　　委員：鈴木 敦、岩橋 幹夫、亀井 尊、中村 くに子
中村 俊彦　　顧問：山下 宏文、菅井 啓之、鈴木 真

第４分科会「里山と森林・林業」
代表：稗田 忠弘　　副代表：福満 美代子　　記録：小野 鈴子　　委員：桐山 正治、大和田 恭、石田 光男、高宮 文
夫今関 貞夫、日暮 岐夫、戸村 寿彦、西塚 健治、鈴木 剛治、野口 英一、本間 一夫、唐笠 敦、鈴木 剛治

第５分科会「里山と竹」
代表：田代 武男　　委員：林 正治

第６分科会「里山と食」
代表：遠藤 陽子

第７分科会「里山と芸術」
代表：宮村 賢治　　副代表：山下 樹里　　記録：長澤 瑠里　　委員：栗原 祐治、高山 斎一郎、川本 幸立、小林 正
幸

第８分科会 「里山と医療・福祉」
代表：横田 耕明　　副代表：林 みね子　　記録：宮崎 京子、委員：岩井 秀夫

第９分科会「里山と政策分科会」
代表：小西 由希子　副代表：内山 真義　　記録：伊原 加奈子　委員：金親 博榮、瓜生 達哉、長 正子、小西 朝希子

第１０分科会「里山と観光」
代表：横山 武　　副代表：朝倉 常夫　　記録：笹子 全宏　　委員：遠藤 勇

第１１分科会「里山と水循環」
代表 ： 荒尾 繁志　　書記 ： 桑波田 和子　　委員 ： 瀧 和夫、千葉 智雄、吉田 正彦、鈴木 優子、三品 圭史

第１２分科会「里山と野生動物」
代表：中野 真樹子　　副代表：石山 大　　記録：李 謙一　　委員：栗原 裕治、小野 鈴子、小島 望、渡辺 理美
清水 享、朝倉 幹晴

第１３分科会「里山と文化と伝統」
代表：加藤 賢三　　記録：田桐 義啓　　委員：平山 喜人、西野 元、福原 経正、笹生 衛、佐久間 豊

第１４分科会「里山と子どもの健康」
代表：藤原 寿和　　記録：半澤 勝男　　委員：井村 弘子、川北 美保子、朝倉 法子

中央学院大学スタッフ
根本 三男、藤掛 昭人、川島 聡
我孫子市スタッフ
渡辺 和夫, 飯塚 豊, 佐藤 由美, 佐藤 和文, 鷹谷 肇, 関根 政義, 沼崎 智, 染谷 迪夫, 大畑 照幸, 木下 登志子
我孫子市岡発戸・都部谷津ミュージアムの会スタッフ
木村 稔、阿部 さと子、首藤 美恵子、関口 秀雄、國貞 功、日向 正彦

里山シンポジウム実行委員会 事務局長　　荒尾 稔
里山シンポジウム実行委員会 事務局会計　　相馬 由起子

目　次

里山シンポジウム実行委員会構成団体及び協賛団体　1

分科会開催日程　2

全体会開催日程　3

主催者代表挨拶　里山シンポジウム実行委員会代表　金親博榮　4

基調講演　「英国のカントリーサイドからみた千葉の里山」 東京情報大学教授　原 慶太郎　5

14 分科会報告　16

分科会報告のまとめ　千葉県立中央博物館副館長　中村俊彦　24

我孫子の里山報告「岡発戸・都部谷津ミュージアム～四季と昆虫～」中央学院高等学校生物部　25

中央学院大学学長　ご挨拶　中央学院大学学長　大久保皓生　28

パネルディスカッション「里山に託す私たちの未来：里山と子ども」　29

・パネラー　千葉県副知事　大槻幸一郎
　我孫子市市長　福嶋　浩彦
　日本雁を保護する会会長　呉地　正行
　和光保育園園長　鈴木　眞廣
・コーディネーター　ちば環境情報センター代表　小西 由希子

里山シンポジウム実行委員会構成団体及び協賛団体 115 団体（50 音順）

あさひクヌギの里，我孫子市岡発戸・都部谷津ミュージアムの会，我孫子市環境レンジャー，我孫子市青少年相談員連絡協議会，我孫子市鳥の博物館友の会，我孫子野鳥を守る会，安馬谷里山研究会，アルカデイアの会，いずみの会，いちはら里山クラブ，いちはら里山会，いちはら市民ネットワーク，ウッディ工房，ちば市民活動・市民事業サポートクラブ(NPOクラブ)，生活協同組合エル，おおあみ里山の会，おおくさ倶楽部，鎌ヶ谷かわ・水・みどり，鎌ヶ谷ホタルの里，鎌取メンタルクリニック，環境パートナーシップちば，木更津市民ネットワーク，君津市民ネットワーク，くじゅうくり地球村，グリーンネット 84，グループ 2000(環境に学ぶ)，ＮＰＯぐるぐるバイオ，グローバル・スクール・プロジェクト(GSP)，桑田里山の会，ごみゼロネット２１，さくら・市民ネットワーク，さくら・人と自然をつなぐ仲間，佐倉みどりネット，桜宮自然公園をつくる会，里山を歩く会，残土・産廃問題ネットワーク・ちば，山武郡市森林組合，山武に雑木林をつくる会，山武町環境問題連絡協議会，さんむフォレスト，山武木材協同組合，ＣＣＣ自然・文化創造工場関東事業部，市民ネットワーク・千葉県，市民ネットワーク・野田，下泉・森のサミット，独立行政法人国立病院機構下総精神医療センター，酒々井里山づくりフォーラム，しろい環境塾，ストップ地球温暖化千葉推進会議，せっけんの街，ソフトインダストリー研究会，大地を守る会，耕さない田んぼの会，田んぼの生きもの調査プロジェクト，千葉アートネットワーク・プロジェクト(Wi-CAN)実行委員会，千葉エコネット，ちば環境情報センター，千葉県建築家協会，(社)千葉県建築士会，千葉県自然観察指導員協議会，千葉県市民農園協会，千葉県森林インストラクター会，千葉県身体障害者福祉事業団・千葉県千葉リハビリテーションセンター，千葉県精神保健福祉協議会，千葉県手をつなぐ育成会，千葉県木材市場協同組合，千葉県木材振興協会，ちばコープ，千葉市心身障害者ワークホーム連絡会，千葉自然学校，ちば千年の森をつくる会，千葉どうぶつ共生条例制定を求める実行委員会，ちばのたね，ちばの山を愛する家造りネット，千葉まちづくりサポートセンター，ちば森づくりの会，ちば・谷津田フォーラム，(有)ちば緑耕舎，長生森の会，手賀沼にマシジミとガシャモクを復活させる会，豊富どんぐりの森，名戸ヶ谷ビオトープを育てる会，成田・里山を育てる会，成東里山を保全する会，成山の自然を守る会，日本雁を保護する会，日本建築学会関東支部 千葉支所，日本不耕起栽培普及会，農薬空中散布反対千葉県連絡会，PW プラス ONE，ビスターリクラブ，プロジェクトとけ，北限のトビハゼを守る会，ぼんた里山の会，水と森と人とＩＮ神崎，水辺の植物同好会，水辺の植物同好会，実籾郷の会，都川と丹後堰公園に親しむ会，八千代オイコス，谷当グリーンクラブ，有害物質から子どもの健康を守る千葉県ネットワーク，有機農業推進千葉県ネットワーク，四街道グリーンヴォランテイアーズ，四街道自然同好会，四街道食と緑の会，四街道にプレーパークを作る会，四街道の農産物を大切にする市民の会，四街道メダカの会，四街道を奇麗にする会，緑懇ちば，ルバーブ，レイチェル・カーソン日本協会あびこ，ワークホーム笑顔，ワークホーム里山の仲間たち，「わたしの田舎」谷当工房

分科会開催日程

No.	分科会名	代表者・連絡先	内　　容	会　　場	開催日・時間
1.	里山と水田 ・稲作	渡邉 英二 [redacted]	・シンポジウム 「田んぼが育む生きものと子どもたち」	県立茂原農業高等学校文化ﾎｰﾙ（茂原市）	4月23日(土) 10:30-16:30
2.	里山と生物 ・ビオトープ	田中 正彦 [redacted]	・野外体験 「谷津田･里山における生物多様性の体験」	千葉市緑区 下大和田の谷津田	5月 1日(日) 10:00-14:00
3.	里山と教育 ・学習	上善 峰男 [redacted]	・野外体験 「里やま散策・野草調理と講演」	千葉市立みつわ台北小学校	4月29日(緑の日) 9:30-14:00
			・シンポジウムと野外体験 「自然体験はオマケではない」	千葉県立中央博物館生態園・講堂	5月7日(土) 10:00-16:30
4.	里山と森林 ・林業	稗田 忠弘 [redacted]	・野外体験「森林ウオッチング」	東金文化会館（東金市）ｴﾝﾄﾗﾝｽﾎｰﾙ	4月30日(土) 10:00-12:00
			・シンポジウム「市民の暮らしと森林の未来：森をつくる地域循環型の暮らし」	東金文化会館（東金市）2階第2会議室	4月30日(土) 13:00-16:00
5.	里山と竹	田代 武男 [redacted]	・シンポジウム「里山と竹害」	東金文化会館（東金市）2階第2会議室	4月30日(土) 10:00-12:00
6.	里山と食	遠藤 陽子 [redacted]	・シンポジウム 「語ろう！千葉の食，伝えよう次世代へ」	鴨川市大山千枚田保存会棚田倶楽部	5月14日(土) 10:30-16:00
7.	里山と芸術	宮村 賢治 [redacted]	・野外体験「谷津田における福祉の在り方と新たな交流の試み」	千葉市緑区大藪池の谷津田	5月15日(日) 10:00-15:00
8.	里山と医療 ・福祉	横田 耕明 [redacted]			
9.	里山と政策	小西 由希子 [redacted]	・シンポジウム「里山と子ども」	中央学院大学６号館633教室	5月21日(土) 10:00-12:30
10.	里山と観光	横山　武 [redacted]	・シンポジウム１「四季の里山のイメージの共有と価値を考える」	中央学院大学６号館634教室	5月21日(土) 10:00-12:30
			・シンポジウム２ 「里山の四季を見る，また，語る」	丸山町「道の駅」 ﾛｰｽﾞﾏﾘｰ公園内 ｼｪｲｸｽﾋﾟｱ･ｶﾝﾄﾘｰﾊﾟｰｸ	6月18日(土) 12:00-17:00 6月19日(日) 9:00-12:00
11.	里山と水循環	荒尾 繁志 [redacted]	・シンポジウム 「健全な水循環：恵み豊かな水を子どもたちへ」	中央学院大学６号館635教室	5月21日(土) 10:00-12:30
			・野外体験「手賀沼と岡発戸の谷津田体験」	手賀沼周辺	6月12日(日)
12.	里山と野生動物	中野 真樹子 [redacted]	・シンポジウム 「里山の野生動物との共存を考える」	中央学院大学６号館657教室	5月21日(土) 10:00-12:30
13.	里山と文化 ・伝統	加藤 賢三 [redacted]	・シンポジウム「遺跡からみた里山景観：縄文から弥生，中世へ」	中央学院大学６号館658教室	5月21日(土) 10:00-12:30
			・野外体験「手賀沼と岡発戸の谷津田体験」	手賀沼周辺	6月12日(日)
14.	里山と子どもの健康	井村 弘子 [redacted]	・シンポジウム 「化学物質から子どもを守ろう」	中央学院大学６号館659教室	5月21日(土) 10:00-12:30
			・シンポジウム「残土産廃と森林保全」	市原市サンプラザ	6月25日(土) 10:00-12:30

全 体 会 開 催 日 程

会　場：　中央学院大学（我孫子市）
場　所：　2005 年 5 月 21 日（土曜日）

□　１３：００　受付開始

□　１３：３０　開 会 （総合司会：千葉まちづくりサポートセンター副代表　栗原 裕治）

・開会挨拶　　里山シンポジウム実行委員会会長　金親　博榮

・基調講演　「英国のカントリーサイドからみた千葉の里山」
東京情報大学教授　　原　慶太郎

□　１４：３０　分科会報告

・水田・稲作	渡邉　英二		・医療・福祉	横田　耕明
・生物・ﾋﾞｵﾄｰﾌﾟ	田中　正彦		・政　　策	内山　真義
・教育・学習	上善　峰男		・観　　光	横山　　武
・森林・林業	稗田　忠弘		・水 循 環	荒尾　繁志
・竹	田代　武男		・野生動物	中野真樹子
・食	遠藤　陽子		・文化・伝統	加藤　賢三
・芸　　術	宮村　賢治	物館副	・子どもの健康	井村　弘子

□　１５：２０　我孫子の里山紹介：「岡発戸・都部谷津ミュージアム～四季と昆虫～」
中央学院高等学校生物部

□　１５：３０　ご挨拶　　中央学院大学学長　　大久保皓生

□　１５：４０～１７：００　パネルディスカッション

テーマ「里山に託す私たちの未来：里山と子ども」

・パネラー　　千葉県前副知事　　大槻 幸一郎
我孫子市長　　福嶋　浩彦
日本雁を保護する会会長　　呉地　正行
和光保育園園長　　鈴木　眞廣

・コーディネーター　ちば環境情報センター代表　　小西 由希子

□　１８：００　交流会

里山にかかわりのある方のネットワークづくりの情報交換会です

・挨　　拶　　千葉県知事　堂本　暁子（代理：農林水産部長　川島 彰比古）

主催者代表あいさつ

里山シンポジウム実行委員会代表　金親博榮

本日は、第 2 回里山シンポジウムの全体会に、千葉県内外の遠隔地から、お越し頂き、ありがとうございます。

（里山シンポジウム開催の経緯）
一昨年 5 月 18 日上総アカデミアパークにおいて開催された全国植樹祭と､全国初の千葉県里山条例の施行を記念して、昨年は､1 周年記念行事として､第 1 回里山シンポジウムを開きました。以来、千葉県では、この 5 月 18 日を「里山の日」と定め、里山の保全、活性化に取り組んでおります。

（第２回里山フェステイバル行事）
全体を構成する「第２回里山フェステイバル」は､「ちば里山センター」の企画運営する、県内７市町での里山体験活動と､「里山シンポジウム」の 2 つの部分から構成されています。

（第 2 回里山シンポジウムの構成）
「里山シンポジウム」は、里山を活動の場とする市民のＮＰＯ・ボランティア団体が実行委員会を設立し、この実行委員会が、企画運営を行い、開催して参りました。
今年は、協賛を含め、その数１１５団体となりました。県内各市町において、約２ヶ月にわたり、分科会を開き、その締め括りとして、本日、全体会を、我孫子市のご協力のもと、中央学院大学の多大なご支援を頂いて、開催する事が出来ました。
開催は、昨年 9 月に設立された「ちば里山センター」、千葉県、（社）千葉県緑化推進委員会、並びに、我孫子市との共同主催、後援千葉市としました。全国的にも、このような活動を、継続している事例は、非常に少ないとの事です。

（第 2 回里山シンポジウムの行事内容）
昨年より 3 つ増加し、14 の分科会（水田、生物・ビオトープ、教育・学習、森林・林業、芸術、医療・福祉、政策、観光、水循環、文化・伝統，子どもの健康、竹、食、野生動物）とし、７市町（我孫子市、茂原市、千葉市、東金市、鴨川市、丸山町、栄町）にまたがる、11 箇所での分散開催としました。
この開催方法は、里山活動が、広く各市町村の住民生活に密着した、永続的な活動となる様にと願い、多数の開催市町のご支援を頂いての決定となりました。

（里山再生の重要性）
荒れた山林や田畑を対象とする里山の再生は、農山村の再生のみならず、都市をも含む、国土の再構築，循環型社会の創造の基礎となるものです。生き生きとした地域づくりに欠かせない環境作りのキーポイントは緑化にあります。各々の地域の活性化はその地域の景観に現れます。子どもの戯れる風景、手入れされた、
里山の再生は、健全な子どもを育む場所として、改めてその子を育てる親たちの認識を深める必要があると考えます。この観点から、今年のサブテーマは､「里山と子ども」としました。

（県民各層の理解と協力）
里山の保全活性化には農山村住民に、都市住民が加わり、やる気を復活させる必要があります。これには広い国民の支援が必要です。里山の多様な機能を、ここに参集されたお一人お一人が、今一度認識を深め、県民の各層にその理解を促す伝達役となり、このシンポジウムが、里山活動を一層広め、具体化する機会となることを願っております。
最後に、このシンポジウムが、今年も開催できた事に対し、関係者の思いやりと、開催への熱意に、敬意と感謝をささげて、里山シンポジウム実行委員会の代表としての挨拶と致します。

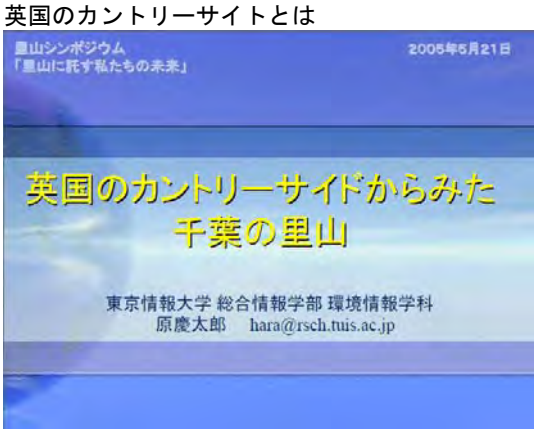
基調講演　「英国のカントリーサイドからみた千葉の里山」

原 慶太郎（東京情報大学教授）

山形県出身．東北大学で生態学を学び，1988 年に東京情報大学開設とともに千葉に移住．佐倉市在住．
　現在，東京情報大学教授，同大学院総合情報学研究科委員長．専門は環境情報論，景観生態学．1996-97 年に英国ロンドン大学に客員研究員として滞在し，カントリーサイドの保全を研究．リモートセンシングや GIS（地理情報システム）などを用いた自然環境保全の研究を進める一方で，里山を「景観」として保全する枠組みについて，中国や東南アジアの調査をとおして論考している．
　著書に「景相生態学」（共著），「田園景観の保全」（共訳），「景観生態学」（監訳）など．（財）自然保護協会理事，千葉県環境審議会委員，ちば・谷津田フォーラム副代表など．

　皆さんこんにちは。東京情報大学の原と申します。
本日は里山シンポジウムの講演として「英国のカントリーサイドからみた千葉の里山」というタイトルでお話をさせて頂きます。

英国のカントリーサイトとは



　ちょうど 96 年から 97 年までの 1 年間、機会があってロンドン大学のワイカレッジという所に滞在しました。そこでの経験等を踏まえまして、千葉の里山保全にイギリスの取り組みが何か役立てるのではないか、ということで紹介したいと思います。
　今回（ジンポジウムが）我孫子市で開催されておりますが、恐らく千葉県の中でも都市型住民の割合が多い地域だと思います。そういった方々が里山にどのような関わり合いをすれば良いのかなどのヒントをお示しできたらと思っております。
　これが、私が滞在しましたーイギリスのロンドンから電車で一時間ほど、ですから東京から 1 時間といったら千葉くらいを

ご想像して頂ければ良いと思いますがーそこの景色です。
　ちょうどこの辺に小さい村があります。ワイ（Wye）という村

なのですが、そこにワイカレッジという大学がありまして、1 年間滞在しました。

　ご覧頂くと分かりますように本当に広大な牧場と、この辺に点在しておりますのがヒツジですが、よくイギリスでは、ヒツジの人口じゃなくて、「羊口」の方が人より多いなんて言われますが、最近は人口の方が多いようです。
　桁数としては同じくらいのヒツジがいます。（この景色を皆さんが）どうご覧になるかですが、単調だなとご覧になる方もいらっしゃれば、良いなとお思いになる方もいらっしゃると思います。こういった景色、景観がどのようにして作られてきたのか、どのように保全されてきたのか、その辺の所をお話したいと思っています。
　英語の「カントリーサイド（countryside）」ですが、辞書を引くと、「田舎」とか「地方」、「田園」という訳が載っております。
　これを最初に訳した方は何方か調べておりませんけど、カントリーサイドに「田園」という訳が付いて大分イメージが変わったのではないのかと思います。今日の講演を「英国の田舎と千葉の里山」というタイトルにしたら、どれほどお出でいただけるか分からなかったと思います。
　残念なことにイギリスには田園はありません。それなのによく「田園」という訳語を付けたなと思う次第です。

日本でも過去に何度かイギリスのブームがあったかと思いますが、最近でいえばここにありますようにリンボウ先生こと林望さんですね。

「イギリスは美味しい」をはじめとするイギリスのシリーズの著作や、最近ではイングリッシュガーデンなどのガーデニングなどがあると思います。

さらにもう少し旅行通の方にはカントリーサイドというのもイギリスの大きな魅力になっているのではないかと思うのです。

たとえばこれは手元にあるものをコピーしてきたのですが、イギリス関連の本の中で、田園とかカントリー、それから田舎町なんてありますけど、こういうような数々のイギリス関連の本が出版されております。

イギリスの魅力はカントリーサイドにあるといっても良いのではないかと思います。

今日はテーマが子供ということで、テーマを最初から子供に特化することも考えたのですが、主催者の方からもう少し広いテーマで、ということだったのでほとんど子供に関係の無いお話をさせて頂きます。

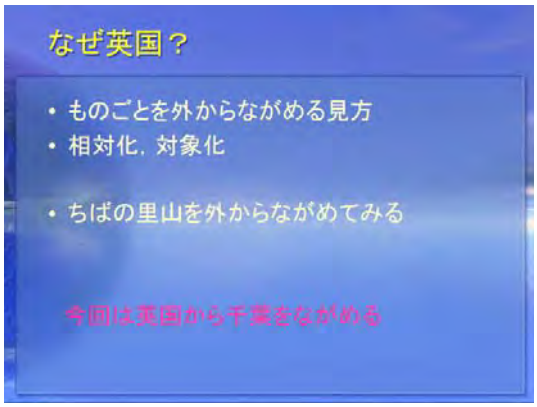
最初と最後に少しだけ触れたいと思います。たとえば恐らく皆さん自身がお読みになった、もしくは皆さんがお子様もしくはお孫さんに読んで上げたような「ピーターラビット」の話、「くまのプーさん」、など。これはいずれもイギリスのカントリーサイドが生み出した話です。

「不思議の国のアリス」、これもやはりカントリーサイドが生まれるきっかけになったと言われております。

最近では「ハリーポッター」でも、映画をご覧になる際にイギリスの色んな田園景観をみるのをひとつの楽しみになさっている方もいらっしゃるのではないかと思います。

なぜイギリスなのか？

今日は物事をちょっと外から眺めてみようと思います。皆さんのなかには、谷津田や里山に入って色々活動されている方が多いと思います。それ自体非常に意義深いことですが、ちょっと引いて、相対化するっていいますか、そのような形で千葉の里山を外から眺めてみるのも、時には大事かと思います。



その外の視点を、今日はイギリスに置くという形で千葉を眺めてみたいと思っております。

英国と日本

イギリスと日本ですが、面積はイギリスが 24 万 3 千 km²、日本が 37 万 km²。人口密度は、イギリスが 245 人／km²、日本は 337 人／km² で、それほど違いはないように見えます。　しかし、日本の居住できる面積を考えますと、日本というのは山国ですから住める所はほんとうに限られているわけですね。そういうことを考えると、この数というのは－実際に旅行した方はお感じになっていると思いますが－大分違って見えます。

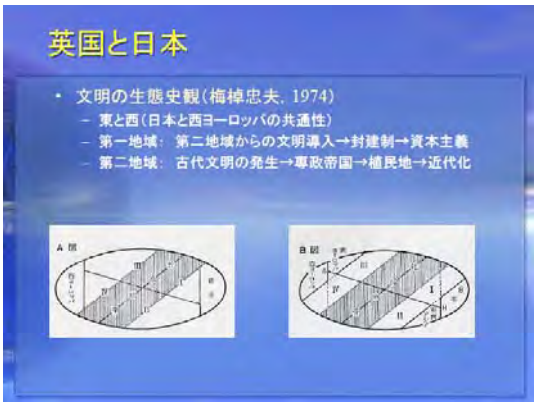
英国と日本　草地の国と森林の国

	総面積（万km²）	耕地率（%）	牧場・牧草地（%）	森林率（%）	耕地面積（ha）／人
英国	24.3	24.4	45.3	10.2	11.04
日本	37.8	12.8	1.7	68.2	1.74

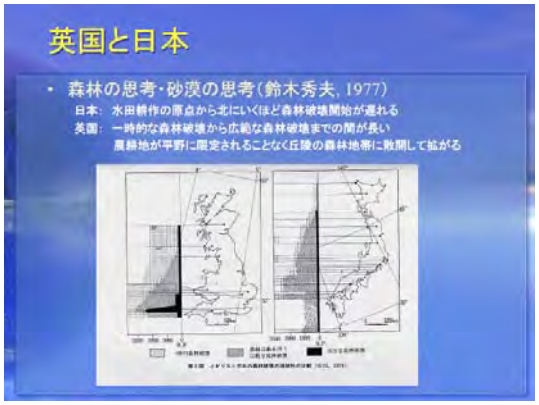
同じく（これはよく言われることですけども）、イギリスと日本の土地利用の割合をお示ししました。

やはり、先ほどご覧頂いた様にイギリスは牧畜の国です。牧場、それから牧草地がほぼ半数近く、45%ですね。

それくらいの面積を占めております。それに対して日本は森林の国と言われるように 3 分の 2 が森林です。これが大きな違いです。



イギリスと日本に関しましては、色々と論考がされておりまして、たとえばお読みになっている方もいらっしゃると思いますが、梅棹忠夫－大阪の民族博物館の前館長さんですが－「文明の生態史観」という本で、日本と西ヨーロッパの共通性なり違いを論じております。



さらには鈴木秀夫ですね。「森林の思考砂漠の思考」という著作中で、両者の比較を行なっています。

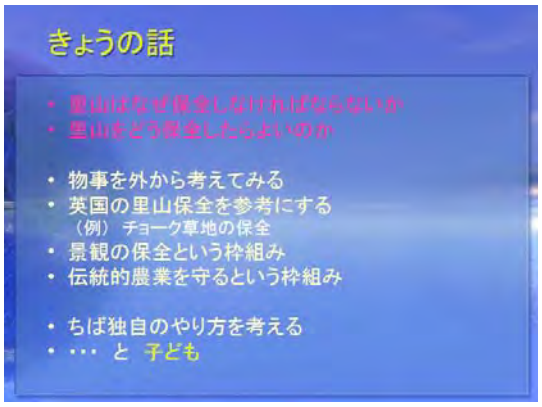
図があまり鮮明ではありませんが、森林破壊の時期と拡がりを示しています。

こちら（左）がイギリスで、右が日本です。今日は私も午前中、里山と文化伝承の会に参加して色々勉強させて頂きましたが、過去に遡って、たとえばこれは現在から遡って千年、二千年、三千年ですけども、完全な森林破壊、それから部分的な森林破壊がどのように拡がったかを表しています。

イギリスは、大陸から色んな勢力が押し寄せて破壊が進んだ訳ですけが、ほとんど内部に関しましてはこの時期に、完全な森林破壊が行なわれています。

それに対して日本は、－日本も弥生の文化が伝わった経路に関しては色々な説があるようですが－、北から南にいくにしたがって徐々にそのような影響が及んでいることが分かります。

きょうの話し



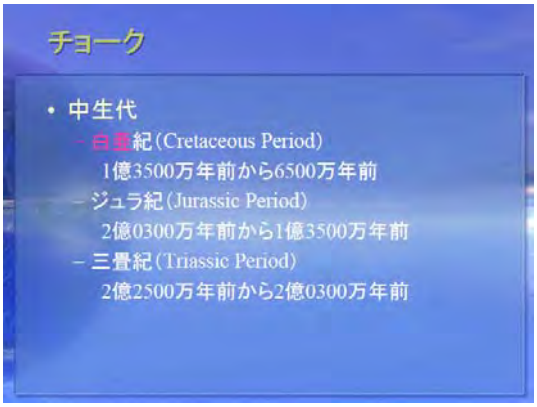
今日の話ですが、里山をなぜ保全しなければならないのか、それから、里山をどうやったら保全できるのか、どう保全したら良いのか、について、先ほど申しましたように外から眺めてみるということで、イギリスの里山保全について、特にチョーク草地の保全を例に、イギリスの里山（カントリーサイド）の保全の取り組みについてご紹介したいと思います。

景観の保全という枠組みですね。やはり見た目の景観を含めて景観を保全するということにイギリスは大分力を注いでおります。それから伝統的な農業を守るそうい

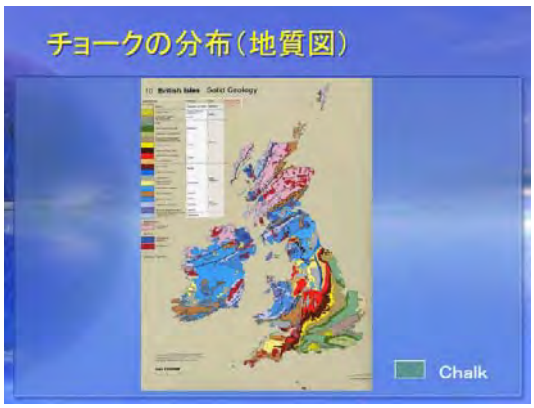
う枠組みですね。
　これの重要さが色んな所で指摘され認識されていると思いますが、それに関してイギリスはどういう取り組みをしているのか。　一つ注意していただきたいのですが、私は決してイギリスかぶれということではございません。
　よくイギリスに行った方で、イギリスは良いよ、良いよ、日本はダメだ、ダメだ、とそういう方が多くて一緒に話してもうんざりすることがありますが、私は決してそうではありません。
　日本大好き、千葉大好きなのですけが、千葉独自の方法をぜひ皆さんと一緒に考えていきたいと思います。
　私も明確な答えは持ち合わせておりません。こういう機会をいくつか利用させていただきながら考えていければと思っております。

チョークエスカープメントとは

　実はこの講演にお招きいただいたきっかけは、千葉環境情報センターの小西由希子さん、田中正彦さんたちが中心になって谷津田レンジャーという取り組みをなさっています。
　今年の２月、そこの講演会で、「チョークエスカープメントと谷津田」というタイトルでお話を致しました。
　その中で今お話したようなことを紹介したのですが、興味をもっていただき、今日、このようにお招き頂きました。



　このチョークというのは、（実物を指して）いわゆる教員が黒板に書くときに使うチョークです。
　エスカープメントというのは急な崖のことをいうのですけれども、このようなところに辛うじて草地（半自然草地）が残っているのです。
　この上はほとんど牧草地とか畑になっております。下も同じように緑が見えますが、これは半自然草地ではなく採草地ですね。ここ（斜面）だけにいわゆる昔ながらの農業（牧畜業）が残っている。
　谷津田も、耕地整理されずに辛うじて残っている日本の原風景といえると思います。両者のそのような共通性を踏まえて色々とお話致しました。チョークの話に移ります。このチョークは中生代の、今から１億 3500 万年前から 6500 万年前にかけて白亜紀という時代がありました。白亜というのはチョークのことですね。
　「白亜の殿堂」などの白亜も同様です。後程スライドでご覧に入れますがフランスからドーバー海峡を船で行くと白い崖が見えます。数十メートルもしくは百メートルを超えるチョークの層が堆積しているわけです。



　これがチョークの分布ですが、この一帯がチョークの見られる場所です。

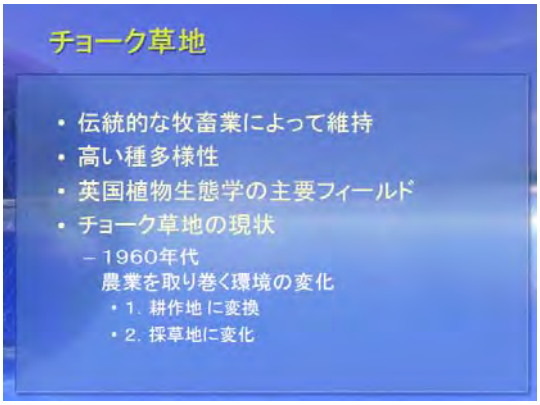
ちょっと専門的になりますがこういった微生物の遺骸が堆積したできた石灰岩、これがチョークといわれるものです。

ワイという小さな村の話

　今日のお話はこのロンドンから南東に１時間ほど行ったところのワイという小さな村の話です。
　ちょうどこのユーロスターの場合は、フランスのパリから、もしくはベルギーのブリュッセルからも鉄道が通っており、アシュフォードという停車駅で降ります。そこからちょっと行ったところがワイです。

これがランドサットの衛星画像ですが、これをご覧になると、ロンドンは住宅地が広がっていて、(日本のデータをお示しできないのですが)、ロンドンに行かれた方はわかると思いますが、大きな公園があります。

ほんとうにロンドン中心から 15 分、20 分行くと、このようなカントリーサイドが広がっているんですね。これがロンドンの市街地ですけど鉄道で 15 分から 20 分行くとカントリーサイドが広がっています。



チョーク草地というのは伝統的な牧畜業、いわゆるヒツジの放牧ですね、これによって維持されている草地です。いくつか植物もご覧に入れますが、非常に種多様性が高く、生態学的研究の対象にもなっております。しかしながら 1960 年代、イギリスの農業を取り巻く環境の変化で耕作地や採草地に変化し、その一部は戦後から始まっているわけですけども、このような変化が起こります。

ここにはグレイジングといいますけど、ほんとにヒツジはぎりぎりまで草を食べるわけですね、このグレイジングによって草を刈ることによって維持された短い草の草地があります。

そこに適応した植物が見られます。ホースシュー・ベッチといいますけど、マメ科の植物です。チョウというのはこの中にもお好きな方がおられるかもしれませんが、だいだい同じ種類の植物しか餌にしないものなのですが、このチョークヒル・ブルーという非常に可憐で綺麗なチョウですね、

このチョウはホースシュー・ベッチしか食べないんですね。そして、この植物は草丈の低い草地にしか生えないのです。そうするとたとえば、放牧をやめますと、草丈が大きくなってこの草がやがて枯れてしまう。そしてそこからこのチョークヒル・ブルーがいなくなる。

このチョークヒル・ブルーというチョウはこの地域の人にとっては非常にシンボル的な、日本で言いますとギフチョウとかオオムラサキくらいの、もしくはもっとポピュラーなチョウでして、これがいなくなるということはその地域の人にとって非常に大きなかけがえのないものを失うということになる、ということで保全運動が起こってきました

今残存するチョーク草地というのは先ほど写真でお示ししましたような、上は畑、下は住宅地といった丘陵地の袖の急傾斜地（エスカープメント）にしか残っておりません。　そこを景観として、この場合の景観というのは、見た目も含みますけど幾つかの生態系の集まった実体としてのまとまりを景観といいます。

その景観を生態学的に保全しようという取り組みがなされました。先ほどお示ししましたワイという地域なのですが、ワイダウン丘陵地なんですが、ここはナショナル（国レベルの）自然保護区域で、自然保護庁（イングリッシュ・ネイチャー）という組織が、積極的な維持管理をしています。

NPO と協働して牧畜農家と契約して、採草地ではなくて、伝統的なヒツジの放牧をして利用してもらう。これはお金も手間もかかるのですが、これをやっていただくことによって草地を保全しようという取り組みがなされています。　後ほど写真で実際の様子を紹介したいと思います。

ここから読み取れますのは、伝統的な牧畜業の持続、日本で言いますと伝統的な農業の持続、これを政府が積極的に推し進めていること。

それから、景観の保全、伝統的な農業、または伝統的な牧畜が行なわれている所は、たとえば寺院とか社寺、神社とおなじような文化的な景観であるという認識です。

カルチュラル・ランドスケープといいますが、これを保全する。さらにさきほどのチョウが減ったというよう

なことですが、これが全てデータとして示されております。すなわち、それぞれの地域で詳細な生物の調査、インベントリーが行なわれておりまして、具体的にどこで何頭いたものが何頭減ったということが示されています。
今日の最後のところでもふれる予定ですが、そういった行政、NPOが連携した取り組みがなされています。これは非常に参考になる事例だと思います。

それでは具体的な絵をご覧にならないとイメージがわかないと思いますので、写真をお示ししたいと思います。ちょっと画像が暗いのですが、これがワイダウンというところです。
チョーク草地ですので草をはぐと白い岩が出てきます。これはワイクラウンというモニュメントです。これは一部白石を使っています。こういった場所が今日の舞台です。　これは私がいました研究室の窓から見た景色です。こういうところにある大学ですので毎日こうやって移り変わる外の景色を眺めておりました。
これはヘッジロウという垣根です。ホーソーン（セイヨウサンザシ）というバラ科の植物なんですが、昔の三圃式農園の囲いで、畑と畑を区切っています。このヘッジロウを保全しようという取り組みがイギリスでは行なわれております。このヘッジロウが野生生物の棲家となり、さらにはこちらの大きいハビタットとハビタットをつなぐコリダー（生態的回廊）としての役目を果たしているということで非常に注目されている場所でもあります。
いくつかの林の絵をご覧頂きます。先ほどお示ししましたように、イギリスは10%くらいしか森林面積がありません。林業などはほとんど成り立たないのですが、いろんな形で合同事業を進めて森林を管理しています。これは小さなクリの林です。こういった小さい栗がなります。
私も食べてみましたが甘い美味しい栗です。ここではいろんな遊具が作られておりまして、これは当時5年生の娘と幼稚園年長だった息子です。
いまは大学生と中学生で、ぜんぜんいうことを聞かなくなりましたが、その当時は一緒に行こうというと、二人とも一緒についてきていろいろなカントリーサイドをまわりました。これはブリン・ウッズ（Blean Woods）という森です。イギリスはフォレスト（forest）というのは特別な意味をもたせています。ウッズ（woods）というのがいわゆる森のことです。RSPBと書いてありますが、これは日本で言う野鳥の会、王立の鳥類保護連盟ですね。
こういったところが土地を買い取ったり補助金を出したりして、森を守っている。野鳥の会が森を管理しているということになります。他にもいろいろな組織がこの活動を一緒に行なっている。
これはブナです。こういった大木もありますがここはほとんど原生林ではないですね。一度なくなった後にできたもので、いわゆるエインシェントフォレストとよんでいるものではありません。たとえばワイルドライフトラスト、そういったNPO、自然を保全したり野生動物を保全したりするようなグループが、いろんな形で管理していました。こういった案内を立てたりですね。
先ほどのクリの林ですが、これが冬の景色です。ちょっとご存じの方は、これは萌芽林だなということはすぐお分かりだと思います。
いわゆるコピスと呼ばれるものです。15年くらいを1サイクルにして、地際からもしくはもうちょっと上から刈る場合などもあり、いろいろやりかたがあります。こういった形で森林を管理しています。

ホスフィールド・コモン（Hothfield Common）というちょっとした湿地があります。そこをアシュフォード市とケント・ワイルドライフ・トラストーこれは野生生物を保全するNPOですーこういったところがいっしょになって市の保全地域を保全管理しているということです。
どういった場所かといいますと、イギリスは結構寒冷ですから北に行くといろんな湿地があるのですが、南部としては珍しくミズゴケの湿地が発達しています。
ミツガシワなども見られます。後ろに見えますのがシラカバとワラビです。このワラビが増えて湿原を脅かすので、刈取りなどの保全管理をやっております。この辺の一部にはヒースに見られるようなツツジ科の植物も見られます。こういう状態でどんどん乾燥化がすすんでいますので、ワラビの刈取りー日本で言えばさしずめクズの刈取りなどにあたるのでしょうがーをやっています。
それからイギリス人というのは歩くのが大好きなのですね。ケント州にノースダウンという丘陵地があるのですが、ロンドンからドーバー海峡までずっと遊歩道がつながっておりまして、103マイル、166kmずっと歩いていけるんですね。
ここから16kmでカンタベリー、45km でドーバーです。パブリックフットパスという私有地を通行する権利を市民が勝ち取ったんですね。遊歩道が至るところに整備されています。
これは97年2月14日の窓から見た景色なのですが、実質は緑緑している景色です。
むこうの芝生は日本の芝（コウライシバ）とは違いまして、青々とした常緑の芝なのですね。夏目漱石が100年前にロンドンに行って、結構鬱屈して過ごした、という手記があるのですが、こういったどんよりした雲が2週間くらい続くんですね。
日本だと、私は山形の出身なのですが、冬は曇った日、雪の日が多いのですが、それでもだいたい三寒四温で3日待つだいたいいい天気になり太陽が顔をだしました。ここでは2週間、ほんとに太陽が見ることができませんでした。私も大分精神的に参りました。
季節を追ってご紹介しますが、そうしてしばらくしますと、さきほどは2月ですが、最初に咲くのがスノードロップという花です。
非常に可憐な花です。どういったところに咲いているのかといいますとちょっとした教会の墓地の脇ですね、ここに白く見えますのがスノードロップです。
これはワイの村をさきほどのクラウンのほうから見たところです。ほんとに広大な、と同時に丘陵が低い、なだらかな地形だということがわかると思います。
これは氷河の影響なのですけれども、丘陵のほとんど上部まで草地とか畑に利用できるということが、逆に言うと森林面積が少なくなる原因にもなっています。
日本の場合はここから急激に上がりますから、そういったところには昔は決して住まなかったし、畑にも（段々畑にも）利用しなかったわけでそういったところには森林が残るわけです。イギリスの場合はこういった形でほとんど利用されつくします。
ここからさきほどの青々とした芝生がだんだん変わっていきます。スイセンがこういった形で咲いております。
冬になると桜草の花が咲き、カウスリップという桜草の仲間が咲いてきます。だんだん春になってきますと、ちょっと見えにくいですがヒツジが草を食んでいます。この黄色く見えますのが菜の花畑です。一面菜の花畑になっておりまして、油をとったりしています。
これは花粉症の原因にもなるようで、嫌われたりもしております。5月くらいになりますと、ちょうど今頃で

すね、イギリスに行く際には今頃が一番いいと思います。これはブナの二次林ですが、ブルーベルという、ヒヤシンスみたいな小さい背丈の花が一面咲きそろって、ちょうど東北で言いますとカタクリがこういった形で早春植物として咲き誇っていますが、ちょうどそういう感じです。

前にごらんいただいたクリ林の林床です。ちょっと鮮明ではありませんが、ヒヤシンスによく似たブルーベルが一面咲いています。

そのほかに同じような早春植物のアネモネなどが見られます。伐採跡に行きますと日がよく当たりますから、ブルーベルがこのような形で咲いているのがわかります。

これは少々人工的な話ですが、イングリッシュガーデン、庭園の話しに移ります。

これはシッシングハーストという庭園で、ナショナルトラストが管理しています。会員になりますと無料もしくは安価で入園できます。

これがドーバー海峡です。こういった形で崖が何十メートルもチョークの堆積した地層になっています。さきほどのチョーク草地が発達しています。崖下に行きますと白墨を固めたようなもろい岩です。むかしはイギリスでは先生が黒板で使っていた。

森林のほうを見ますとこういう形でチョークの上にうすくのっています。

これがワイダウンという保護区です。こういうところをイングリッシュネイチャーという組織が借り受けて管理しています。これが畑です。畑はチョークで真っ白です。ワイダウンは国の自然保護区になっています。

これが遊歩道で、勝手にあけて入っていいのです。これが下から見たところです。ヒツジが食べている短い草の様子がわかると思います。そこにこのようなラン（ビーオーキッドといって蜂に擬態したラン）、マツムシソウやアザミの仲間とかキキョウの仲間などが見られます。

これがホースシュー・ベッチという、先ほど紹介したチョークヒル・ブルーというチョウの食草です。ホースシューというのは蹄のことなのです。ここ（果実）が蹄の形をしているのでそういいます。これは背丈の高い草地です。こういうふうに手入れしないといわゆる放棄水田のようになってしまい、ここにはホースシュー・ベッチは入れないですね。したがって常にヒツジを放して短くしておかないといけない。

秋の景色です。これは雑草なのですがポピーです。7月末になると、このような景色で緑緑していた所が茶色の景色に変わって一年が終わります。

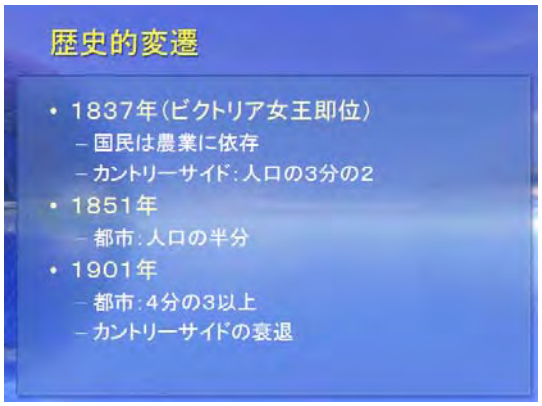
向こうの学校は8月、9月から始まるのですが、日本は稲のサイクルにあわせて4月、向こうは麦のサイクルに合わせて8月というのが毎年の開始です。そんな形で一年を過ごしました。

イギリスの農業と環境

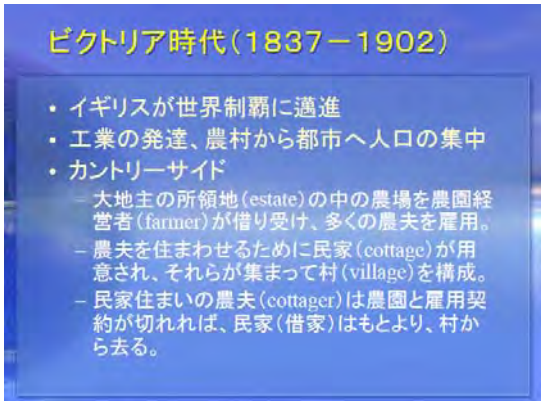
イギリスの農業と環境の関係について残りの時間でお話ししたいと思います。

ビクトリア女王は1837年に即位するわけですが、この当時は農業に依存していました。

そして、1851年には人口の半分が都市にだんだん移っていくわけですね。1901年、都市の人口が4分の3になりました。このころからカントリーサイドの衰退が目立ち始めるわけです

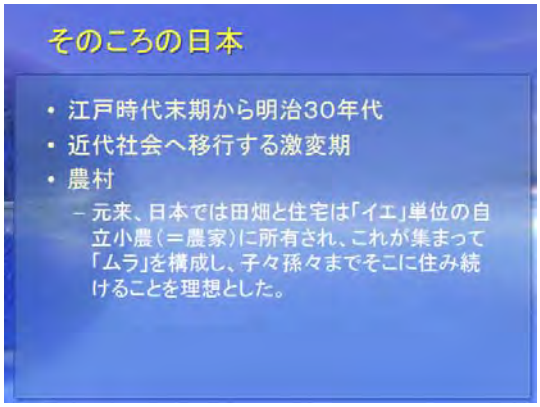


ビクトリア時代というのは、ちょうどイギリスが世界制覇に邁進したころですが、工業化の発達で人口が都市に集中しました。



カントリーサイドというのはエステートという荘園をファーマー（農業経営者）が借り受けて、それをコテッジャー（農夫）という小作に貸して、その契約が終われば コテッジャーという農夫はどこかに行ってしまいます。

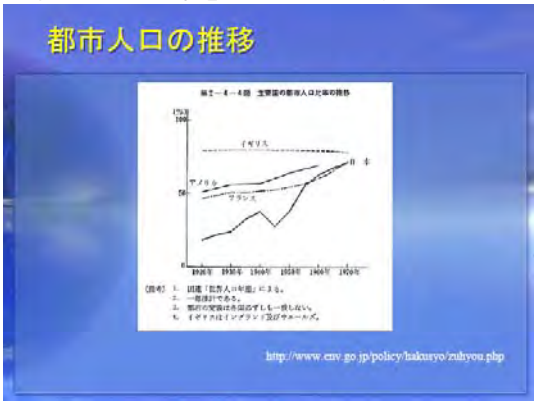
そのころの日本



それに対して日本は、村を構成しそこに住み着くのを理想とした。こういったところが、放牧民と水田と基幹とするような人々の違いかな、と思ったりします。

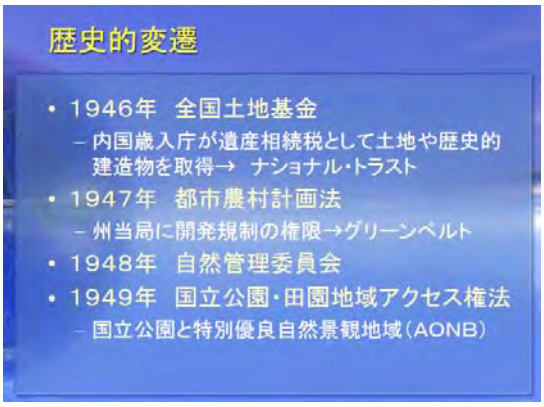
先ほど4分の3が都市に移ったと申しましたが、この時代、都市人口の割合は、イギリスは変わってないですね。日本の場合、1920年からの統計ですが、戦後、いわゆる高度成長期に急激に都市化しているわけですね。これは100年前のイギリスとまったく同じですね。これが

日本の里山に不幸をもたらしたと考えることができます。



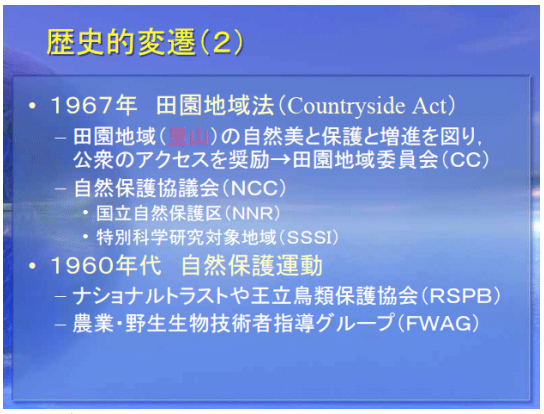
歴史的変遷

イギリスは戦後、全国土地基金というのを作りまして、遺産相続税を土地や歴史的建造物を取得することで、いわゆる物納することで、ナショナルトラスト、有名な NPO 組織が作られたわけです。



そして土地農村計画法でグリーンベルトをつくる、この時代にそういう計画的な政策を行なった。

自然管理委員会や国立公園、もしくはカントリーサイドのアクセス権法、ここでは、エリア・オブ・ナチュラルビューティ（AONB）といいますが、自然の景勝地、景観の優れた場所を AONB という形で指定して保全するような動きが、第一次世界大戦後まもなく始まっているわけです。

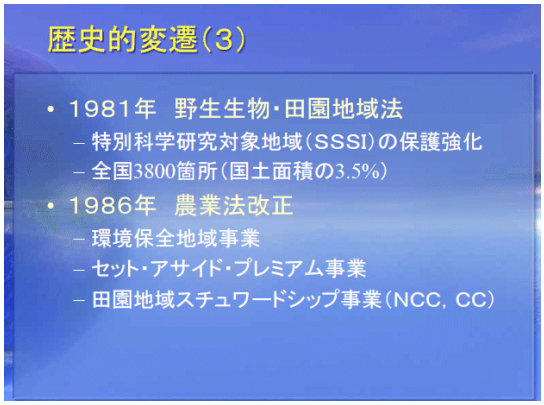


つづいてカントリーサイド法が 1967 年に成立し、里山の自然美の保護と増進を図り、公衆のアクセスを奨励ー健康増進のためにアクセスを奨励ーすることになりました。カントリーサイド・コミッションというのをつくりまして、保護に乗り出しました。

もうひとつ、自然保護協議会ができていろんな自然を、もしくは学術的に貴重な所を SSSI（特別科学研究対象地域）に指定して保全・研究することになりました。

それから 60 年代に自然保護運動がおこりました。ナショナルトラストやさきほどの RSPB(王立鳥類保護連盟)が自然保護運動に乗り出しました。

とくにこの RSPB の中の農業野生生物技術者指導グループ（FWAG）というもの中心になっていろんな運動の中核になったということです。

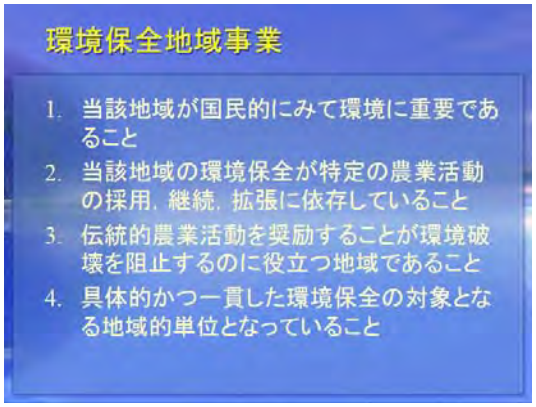


それで野生生物田園地域法に則って、野生生物を保全しようということで合同調査をし、農業法を改正して環境保全型の農業に変わってきたわけです。

たとえばスチュアードシップ・スキームという事業を始めまして、カントリーサイドの管理人になることに対して補助金を支払う。

この保全地域事業というのは、当該地域が国民的に見て環境的に重要である、もしくはいわゆる伝統的農業を奨励することが環境破壊を阻止するのに役立つ地域である、具体的かつ一貫した環境保全の対象となる地域的単位となっている、ということで保全地域事業が始まります。

環境保全地域事業

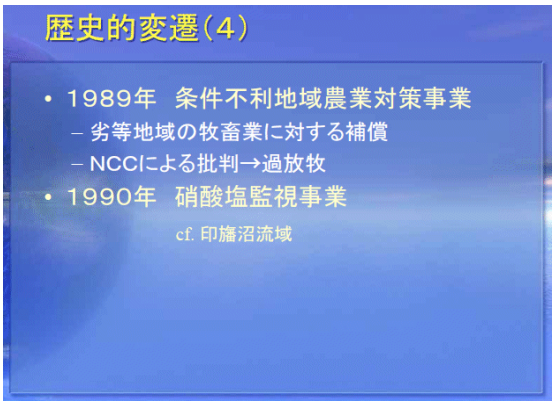


さらに 80 年代 90 年代になりまして、条件不利地域農業対策事業が始まります。

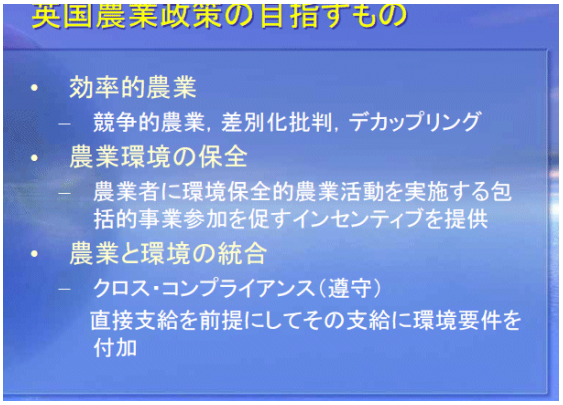
それから硝酸塩監視事業、これは最近千葉でも少しずつ話題になっていますが、窒素の問題というのは向こうでは大きく取りざたされているわけです。

それから NPO 方面に対しての助成、森林に対しての助

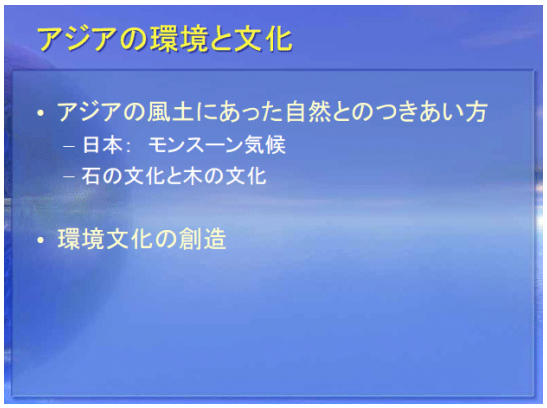
成等が次々と打ち出されています。
　イギリスの農場政策は効率的農業、急速的農業を目指しています。
　向こうは一戸あたりの面積が非常に広いのですね。したがって、統計を見てみますと、日本の場合は 2 ha 以下を細かく 0.5 ha 単位で切るんですね。
　向こうは 5 ha 以上から始まるので一緒に比較できません。ですから、これは向こうだからできることかもしれません。



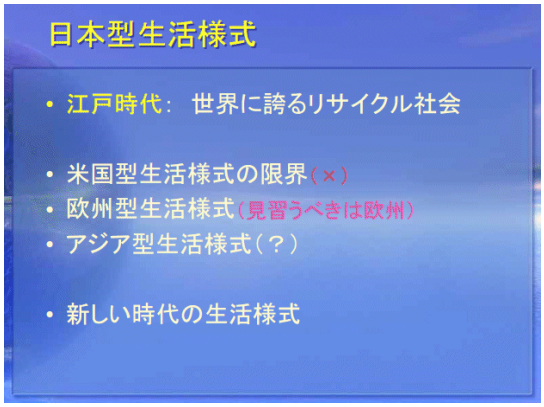
　農業環境の保全ということで、先程申したように環境保全農業活動を実施する包括的事業になります。インセンティブを提供する。農業と環境を統合する、クロスコンプライアンスといいますが、直接支払いを前提として、その支払いに環境条件を付加するというような政策を行なっております。一方 EU 共同体の一員ですので共通の政策、枠組み取り組み、もしくは規制の場合もありますけどもそういったことも併せて行なっています。



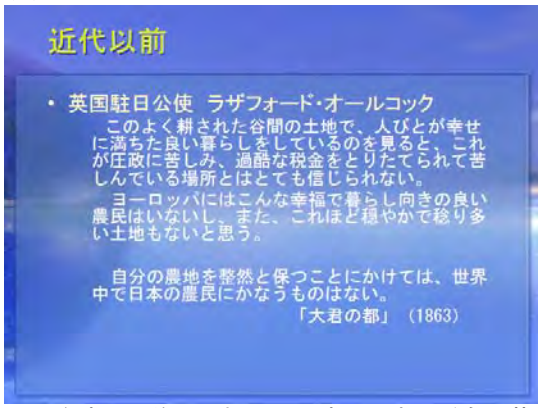
　イギリス人は里山が大好きなのですね。　先程示しましたように、アシュフォードというユーロスターの止まる市と、先程の人口 1000 人位のワイという小さい村とですね、アシュフォードよりもワイに住んだほうが、たとえば住宅なんか高いのですね。アシュフォードのほうが安いのです。したがって、人びとの気持ちとして、やはりカントリーサイドに住みたいということがあると思います。
　また、フットパスというのが整備されてパブ(居酒屋)ですとかイン（民宿)、こういった所に寄りながら歩く。あとは一度失われた自然に対するいろんな憧憬等があるように思います。
里山保全の考え方を文化まで高める
　そろそろまとめないといけないのですけれども、里山を保全するときに、どういった切り口があるかといいますと、私は文化まで高めないとなかなか守れないのではないか、と思います。
　それと、自然との付き合い方も、風土にあわせないといけないのですが、いろんな場所にあった付き合い方というものがあるはずで、それを一緒に模索しないといけないと思います。



　たとえば江戸時代では、いろんな所で言われていますが世界に誇るリサイクル社会でした。どこかが間違ってしまったと思うのですけれども、これ(米国型生活様式)が、いろいろ悪さをしているのではないかなと思っています。　米国型生活様式は、日本の風土に合わない。見習うべきは欧州であって、たとえば京都議定書の時にでも、二酸化炭素の削減率も、アメリカとヨーロッパの間をとるのではなくて、もっとヨーロッパよりの値を出すべきだったと思います。



　まあその辺は置いておきますが。やはり、新しい時代の生活様式を一緒に考えていかないといけないと思います。



　明治時代以前、これは江戸時代ですけども、英国の駐

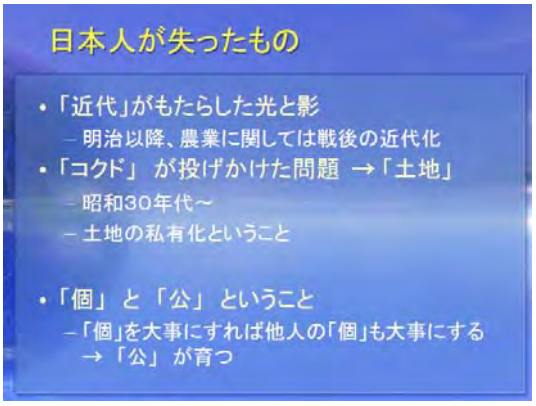
日公使のラザフォード・オールコックという人は、行った所が江戸近辺だったのでしょうけれども、「このよく耕された谷間の土地で人々が幸せに満ちた良い暮らしをしているのを見ると、これが圧政に苦しみ、過酷な税金を取り立てられて苦しんでいる場所だとはとても信じられない。

ヨーロッパにはこんな幸福で暮らし向きの良い農民はいないし、またこれほど穏やかで稔り多い土地もない。自分の農地を整然と保つことにかけては、世界中に日本の農民にかなうものはない。」と、こう言っているのですね。

これに対しては、事実、「おしん」の例もあるようにすごく苦しいところもありました。

しかしながら一方でこういうところも多かったようなのですね。それがいろんな形で「昔はひどかったですね」というようなそういう言い方をされている、という主張をなさる方もいます。

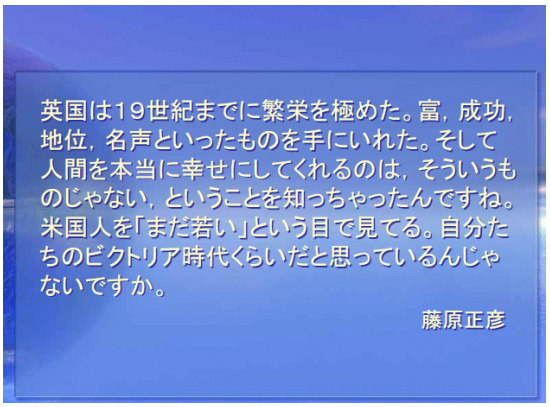
日本人が失ったもの



日本人がどこで間違ったか。これは私見ですが、明治以降のいろんな動きですね、

それから農地に関しては戦後のいろんな近代化といわれる政策、たとえば「コクド」に代表される問題でもいろんな影響があると思います。もうひとつは、これは私がイギリスに一年いて一番感じたのはこのことです。

「個」を確立しないと、極端な言い方をすれば民主主義もないし、これから議論になるのであろうパートナーシップも成り立たないと思います。



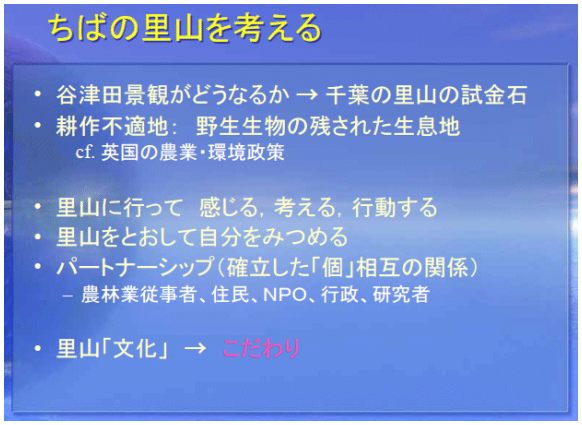
一方では、最近の動きを見ると「個」、「個」という自己中が増えた、という議論があるかと思いますが、あれは中途半端な「個」で本当の個が確立していないように思います。これは私の見方なのですが、「個」を大事にして公を探るというのが道筋だと思います。

数学者の藤原正彦さんが、「英国は 9 世紀までに繁栄を極めた、富、成功、地位、名声といったものを手に入れた、そして人間を本当に幸せにしてくれるのはそういうものじゃないということを知っちゃった。アメリカ人はまだ若いという眼で見ている、自分たちのビクトリア時代、100 年前くらいだと思っているんじゃないですか。」と言っています。その通りだと思います。

ちばの里山を考える

さて、千葉の農業です。谷津田景観ですね。

私自身も中村俊彦さんと谷津田フォーラムという活動をやっていますので、これはちょっと触れておかないといけないですね。



谷津田景観がどうなるのか。これは千葉の里山保全のひとつの試金石になると思います。もちろん里山とか雑木林も含めた意味での景観です。

先程申したように、谷津田は耕作不適地なのですが、不適地というのはいわゆる経済的に見たらなかなか大変なところなのですが、生物多様性の保全など重要な役割も果たしている。

やはり先程のイギリスの農業政策に学ぶと、いろいろな形で守っていかなければならない。里山に行って感じて考えて行動する、自分を見つめることになる。先程申したように、自立した個同士の相互の関係、パートナーシップが大事です。

それを文化にまで高める。やはり「こだわり」だと思います。

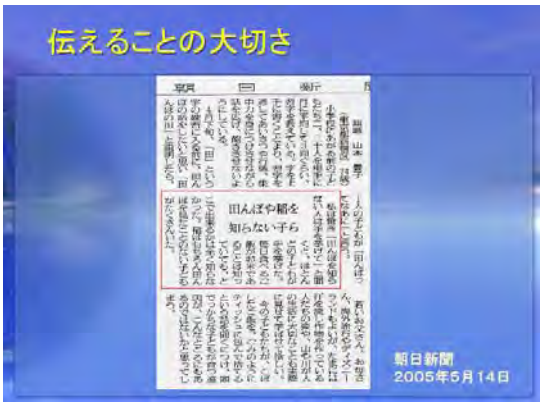
もう一度述べますが、農業従事者、住民、NPO（というのはなかなかこなれない訳なのですけど）いわゆる仲間ですね。

仲間、研究者、行政、とくに自立した農業従事者、住民、仲間、研究者が一緒になって取り組んで、行政は、なかなかいい言葉が見つからなかったのですが、弾力的かつ柔軟に、いわゆる縦割り無しにということもあるのですが、こういった形の取り組みによって解決していかないといけない問題でないかと思います。

これからの時代というのはそれぞれの主体の力量が問われる、そういう時代になると思います。

「かつて子供であったことを忘れずにいる大人はいくらもない」というのは星の王子様のサン・テグジュペリの言葉ですね。私の大好きな言葉です。

　みなさん、かつて子供だった頃のことを自分が思い出して、どうすればいいかと考えると、おのずとやらなければいけないことというのがわかると思います。＜スライド４７＞　先週の朝日新聞ですが、新宿にお住まいの習字の先生が「田圃」という字を教える時に、田圃そのものを知らない子供が多かったというのですね。

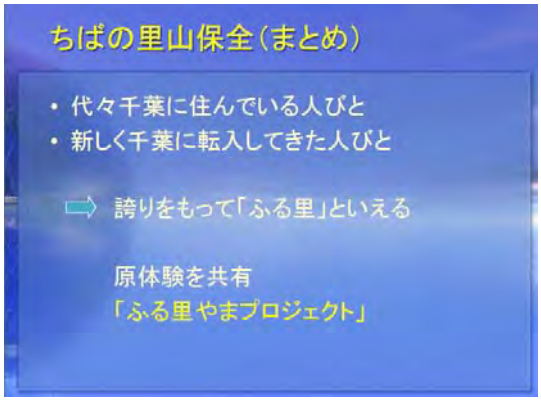


　行ったことがないと。ご飯は知っているけども、稲からとれているということを知らない子供が多かった。これはほんとに驚くべきこと、由々しきことだと思います。

　ここにいらっしゃる佐倉市の小野さんが取り組んでいらっしゃる手繰川の親水工事の現場なのですが、これがその場所れは私が自転車で通りがかって遭遇したのですが、非常に礼儀正しいしっかりした子供でした。
　これだけ泥んこになって遊んでいる。ほんとうに僕はうれしく思いました。

千葉は故郷
　中村さんが「里やま自然誌」という本を出しまして、一番初めにこういうことを書いているんですね。「うさぎおいしかのやま　こぶなつりしかのかわ」の歌ですね。これが中村さんの原体験だとおっしゃっています。
　古里、皆さんお持ちだと思いますが、私は山形の米沢というところが古里なのですが、千葉に住んでいるほうが、ちょうど今年が境なのですが、もう多くなりました。

　代々千葉に住んでいる人、新しく千葉に転入してきた人が誇りを持って、古里といえるようなそういったところを作っていかなければならないと思います。



　それには、原体験を共有するって大事だと思いますね。それがないとイメージがもてず、なかなか構想できないですね。古里と里山のプロジェクトを一緒にしたのは、そういう形で千葉の里山を考えていきたいという思いからです。

　最後なのですが、柳田国男の、「村は住む人のほんのわずかな気持ちから美しくもまずくもなるものだ」という言葉で締めくくりたいと思います。今日来ていただいた方は、おそらくすごくいい気持ちをお持ちの方で、それを実践している方が多いと思います。
　そういった輪を少しでも隣の人に広めて、千葉の里山、千葉の環境、美しき千葉にしていきたいものだと、思います。

どうもご静聴ありがとうございました。

分 科 会 報 告
里山に託す私たちの未来「里山と子ども」

雑木林で 遊ぶ・学ぶ・子どもたち

写真　小幡和夫（中村俊彦著「里やま自然誌」より）

1　里山と水田・稲作分科会

水田稲作分科会では4月23日茂原市の茂原農業高校文化ホールで分科会を開催しました。分科会では、生き物の視点から田んぼを見直し、千葉県の水田農業を環境創造型へ転換してくための方向性を、次世代を担う高校生を交えて検討いたしました。シンポジウムでは初めに、茂原農業高校農業土木部が部活動で実践している、一宮町で30年間放棄された谷津田再生の取り組み状況を報告、荒れた谷津田を再生させた時の達成感、生き物が戻ってきたときの驚きと喜び、その方向性がこれから千葉県での農業を楽しくやりがいを感じられる農業のあり方であることを、高校生から改めて思い知らされました。

つづいて、宮城県立田尻高等学校教諭の岩渕成紀さんからは、「ふゆみずたんぼの生きもの曼荼羅」と題しての基調講演がありました。岩渕さんは生き物を活用した農法を例に挙げ、自然を大切にする心を農業に感じられるようにすることが大切だと思う、と語りました。

ミニコンサートでは村起こしシンガー田中卓二さん、音楽とトークにより田んぼと自然再生について楽しみながら理解を深めました。

パネルディスカッションでは、田んぼの仕事でも、今効率化のために、一人一人が孤立化してしまい、人間関係が崩されてしまった、人間関係の再構築が必要だということや、農業は重労働のイメージだが、毎日違った自然に出会える楽しみがあるという話がありました。（渡邉英二）

２　　里山と生物・ビオトープ分科会

～谷津田･里山における生物多様性の体験～

場　　所：千葉市緑区大和田
実 施 日：2005年 5月 1日（日）
　10:00～12:30: 観察会と生きもの調査実践
　14:00～15:30:こどもたちの企画による谷津田･里山遊び
参 加 者：70名（2～75歳）

観察会と生き物調査

●趣旨
人が適度に手を加えることによって、
生物多様性が維持されている「里山の自然」

＜昨年＞データをあげて学術的に評価

＜今年＞

･観察会･生きもの調査 ➡ 生物多様性体験

･こどもの企画で里山遊び

↓

里山＝安全で楽しい遊び場

田んぼ生きもの調査（写真：荒尾　稔氏）

午後は、こどもたちが企画した谷津田･里山遊び

谷津田･里山は、
生きものだけでなく、
こどもたちも育んでいた

こどもスタッフ

生きもの
ジェスチャー

人も生物多様性の要素

●課題：同様の活動を他地域で実践していくには･･･

生物・ビオトープ分科会では、谷津田と里山における生物多様性の体験ということで、5 月 1 日に千葉市緑区下大和田というところでイベントを行いました。この場所は千葉市が調査した 63 箇所の谷津田のうち、最も自然度の高い、生き物が豊富だと評価されている場所です。生物・ビオトープ分科会は、「人が適度に手を加えることによって、生物多様性が維持されている『里山の自然』」というメインテーマを掲げております。昨年は里山のデータを挙げて学術的に評価しました。今年は観察会や生き物調査をすることによってそれを体験してもらおう、それから子どもの企画で里山遊びということで、里山は安全で楽しい遊び場だということを検証してみたいということでイベントを行いました。これが観察会なんですが、午後は、子ども達が企画した谷津田里山遊びということで、子ども達が全部企画しました。中学 1 年生の翔くん、小学 4 年生の千春ちゃんと瑞紀ちゃん、年長のげんちゃんです。この子たちが３つくらいイベントを考えました。気が付いてみたら、谷津田里山は生き物だけではなくてこのような子ども達も育んでいたということです。この子達がここに関わったのは 4～5 年前からで、げんちゃんなんかオムツをはきながらイベントをやってました。課題としては、同様の活動を他の地域でどのように実践していったらよいか、非常に大変だなあと感じました。以上です。

（田中正彦）

３　里山と教育・学習分科会

「里やまは人づくりの場」

●野外体験1

「里やま散策・野草調理と講演」
千葉市立みつわ台北小学校　4月29日(緑の日)　参加105名
・ 講師:小平哲夫(千葉県森林研究センター次長)
　　亀井尊(千葉経済大学附属高等学校教諭)

●野外体験2

「生態園での自然教育実践」
千葉県立中央博物館生態園　5月7日(土)　　参加25名
・ 講師:中村俊彦(千葉県立中央博物館副館長)
　　林浩二(千葉県立中央博物館生態学研究科)
　　亀井尊(千葉経済大学附属高等学校教諭)
　　寺嶋嘉春(森林文化教育研究会幹事)

「自然体験はおまけじゃない」シンポジウム

●シンポジウム

「自然体験はオマケじゃない」
千葉県立中央博物館講堂　5月７日(土)　　参加１３２名

・ 里山と環境教育の意義：大槻幸一郎(千葉県前副知事)
・ 自然体験はオマケでない理由:
　　中村俊彦(千葉県立中央博物館副館長)
・ 里山は人づくりの場:筒井迪夫(東京大学名誉教授)
・ パネリスト　：　亀井尊(千葉経済大学付属高等学校教諭)
　　中村くに子(たいよう保育園園長)
　　浅野誠(千葉県立精神科医療センター長)
　　湯上昇(森林インストラクター)
・ 総合司会　：　鈴木敦(NPOみどりのネットワーク千葉)

-オカリナとギター演奏　：　山口利夫ほか
-わらべうた　：　なぎさ保育園,
たいよう保育園の園児のみなさん

なぎさ保育園　たいよう保育園の園児による
「わらべうた」でシンポの会場が和む

３ まとめ：里やま問題解決のキーワードは教育にあり！

● 現状

・ 物が豊かな社会になった半面，人の心の問題が深刻化
・ 子どものキレル・引きこもり，少年犯罪が増加．
・ 子どもの遊びは「家の中でのテレビ・ファミコン」が増加し
「里やま・自然体験」が減少．

● 結論

・ **基層文化の根を腐らせてはならない，里やまの疲弊は都市の凋落につながる．**
・ **里やまでの自然体験は人としての大脳をつくる．**
・ **自然体験は子どもたちの感性を磨き，教育(生きる力)の原点オマケではない．**
・ 子どもの遊び・自然体験の「時間・空間・仲間」の三間の確保は大人の責任

● 課題

・ 学校教育における総合学習の重要性の正しい認識
・ 社会教育が子どもの自然体験をいかに支援するか
・ 社会の在り様を子どもの視点で考える

教育・学習分科会は、我が国生活文化の伝承。幼少期に里山の自然に触れ、「情緒・感性」を育てる観点で「里山と子ども」という命題を実践しています。今回は２回の野外体験活動とシンポジウムをふまえ、その現状や課題等についてまとめました。

4 月 29 日(緑の日) 千葉市若葉区みつわ台北小学校をベースに近隣の東寺山、原町、源町など里山を訪ねました。この日、原町の谷津田では田の神、水の神に豊作を祈願する神事があり、集落の方々と交歓する一幕もありました。観察後は採取した野草を家庭科教室で調理。参加した 105 名が自然の恵みに感謝しました。

5 月 7 日（日）千葉県立中央博物館（132 名参加)。午前は生態園で草木遊びなど子ども向けの遊びを修得。
午後は講堂でシンポジウム「自然体験はオマケじゃない」をテーマに 4 人の発表者がパネル討議を行いました。冒頭大槻副知事が挨拶し、千葉県里山条例誕生の逸話を紹介。中村中央博物館副館長が、大脳と自然体験の密接な関わりを講演。筒井東大名誉教授が「里山は人づくりの場」と題して基調講演を行いました。(上善峰男)

4　里山と森林林業分科会

市民の暮らしと森林の未来　～森をつくる地域循環型の暮らし～

共催　：　東金市

●自然体験:
日　時　2005年4月30日(土)9:30～　　参加者　49　名
受付開始　東金文化会館エントランスホール
10:00～12:00　森林ウォッチング
鴇ヶ嶺の森～あしたの森

●シンポジウム:
日　時　2005年4月30日(土)
会　場　東金文化会館2階会議室　　参加者　53　名

昼食、交流

パネラー　：
吉岡　實　:山武郡市森林組合 組合長
東金市建設部都市整備課　　東金市経済環境部農政課
東金市経済環境部環境保全課
本間 一夫 :さんむフォレスト
コーディネーター　:稗田 忠弘 :さんむフォレスト

その他:パネル展示
東金市建設部都市整備課　東金市経済環境部環境保全課
東金市経済環境部農政課　ちば環境情報センター
さんむフォレスト

プレゼント　東金市建設部都市整備課から 花の種をプレゼント

4　まとめ：地域循環型の暮らしが森をつくり、地域をつくる！

● 現状

・戦後の無理な拡大造林の後、森林の手入れが出来ていない。

・東金市は市民による森づくりなど、市民の自然体験を支援している。

・山武杉を活用した住まいづくりなど、地域循環による森林再生運動の実施。

● 結論

・森林の木材生産以外の多面的機能を守るために人の手が入る必要がある。

・地域循環型の暮らし方が、地域の森や自然を守る力になることを再確認する。

● 課題

・木質バイオマスエネルギーの利用など、森林が暮らしと結びつく仕組みづくりが必要である。
・林業が産業として成立する形での市民参加と行政の協力を考える必要がある。

森林林業分科会は、山武杉の産地東金市を会場として、東金市役所との共催で分科会を開きました。午前は東金市民がつくる森林公園をウォッチングし、午後はパネルディスカッションを行いました。森林が美しかった過去について知り、現在の状況を理解して、森林の未来を考えようというのがパネルディスカッションのねらいです。

生活資源の多くを森林に依存していた時代は、地域の暮らしと森林が美しく調和していた、という過去の話が基調になりました。現在、地球温暖化が大きな問題となっているなかで、木材が理想のエネルギー源といわれながら、木材業界の中では端材や残材の処分に困っていること、利用しようとすれば現代の暮らしの中で、利用できるテクノロジーが身近にあること、などを明らかにし、市民が木材の産地、エネルギー源としての木質バイオマスの産地に、暮らしている恩恵にあらためて気づくことが、森林再生に関心を持つ第一歩になるものと考えました。東金市の田んぼの学校の取り組みからは、林業へ多くの示唆を得ました。田んぼの学校は、農民が遊休農地を利用して、有償で一般市民に農業指導をする農業の一形態ですが、農民の発想の背景に、農業という職業の公益性の自覚と、農業者としての誇りがあります。

森林所有者に森林の公益性と林業の重要性がしっかり自覚されてこそ、市民参加の森づくりのあり方が、明確になってくるものと思います。昨年の第１回里山シンポジウムでは、市民、森林所有者、行政のそれぞれの役割に応じた、相互協力システムの構築が必要である、と提言しましたが、今回はそれを受けた一つの成果として、継続的な議論の場をつくることが出来たものと思います。　　（稗田忠弘）

５　里山と竹分科会

里山と竹害について

●シンポジウム:
日時　4月30日(土)　10:00～12:00まで
場所　東金文化会館2階　第二会議室
参加者　22名

竹害について説明
竹についての相談、質問の実施

メンバー
田代武男(竹研究会会長)
田中昭三(竹研究会理事)
林　正治（竹研究会理事）

５　まとめ　里山問題解決には竹の枯殺、竹林の整備が急務

● 現状

１　里山の美しい竹林は、日本の原風景である。「竹馬の友」といわれるように、これまで子供と竹とは切っても切れない関係にあった。ところがこの40年間に里山をとりまく環境は大きく変化している。

２　里山の荒廃の一因は、放置された竹林にある。放竹林は里山の生態系に悪い影響を与え、防災の面からその危険性が指摘されている。

● 結論

１　子供たちの健全な育成には、美しい里山、美しい竹林が欠かせない。

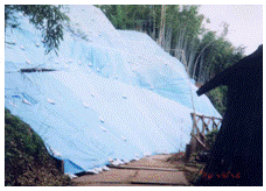
２　里山を守るためには、竹の故殺、竹林の整備が急務である。

● 課題

１　竹は地下茎で繁殖する問い特性があり、常識的な対応では歯が立たない。竹に対する知識の普及が必要

２　放竹林は生物多様性を低下させ、土砂災害を頻発させる。危険性への認識が求められる

３　拡大する竹林を阻止するには、個人では無理である。行政あるいは研究機関に働きかけ、その対応が急務である



竹分科会では里山と竹害を取り上げました。4 月 30 日東金文化会館で行いました。シンポジウムでは、放竹林あるいは竹害についての説明、竹について困っている方がいれば相談にのり、竹についてのいろんな質問を出し、それに答える形で行いました。里山は本来美しい竹林で覆われていました。美しい竹林は日本の原風景です。竹馬の友と言われますように、これまでは子どもと竹とは切っても切れない関係でありました。ところが、この 40 年の間に里山をとりまく環境は大きく変化しております。里山の荒廃の一つの原因は放置された竹林にあります。放竹林は里山の生態系に悪い影響を与え、災害のもとになっていて、災害の危険性が最近指摘されています。写真をご覧下さい。放竹によって裏山ががけ崩れを起こしている様子です。真竹や孟宗竹では地下茎が 30 センチまで伸びるのですが、放竹林では地下茎が弱り、一般的に考えられているよりも頻繁にがけ崩れが起きている。その 30%から 40%が放竹林が原因ではないかと調査し、対策を考えていかなければならないと思っています。子どもたちの健全育成には美しい里山と美しい竹林が欠かせません。そのためには放竹林の枯殺などの竹林の整備が急務です。課題としては、竹は地下茎で繁殖する特性があり、常識的な対応では歯が立ちません。竹についての基礎的な知識の普及が必要です。放竹林は生物の多様性を低下させ、土砂災害を起こさせているという危険性を多くの方に認識してほしいと思っています。拡大する竹林を阻止するには個人では難しいと思われるので、行政等による対応が望まれます。　（田代武男）

６　里山と食分科会

車座食談義　みんなで語ろう！　千葉の食

●自然体験:

日時　2005年5月14日（土）
会場　鴨川市　大山千枚田保存会棚田倶楽部
参加者　36名

１　太巻き寿司つくり

指導　千葉県伝統郷土料理研究会
龍崎　英子さん　峯岸　喜子さん　杉崎　幸子さん
伊藤　芙美子さん　山形　礼子さん

２　車座食談義「みんなで語ろう！　千葉の食」

パネラー　石田　三示さん（大山千枚田保存会理事長）
池田　恵美子さん（南総ふるさと発見伝まほろば編集長）
菅沼　弘夫さん（子どもに学ぶ会代表）
平本　紀久雄さん（千葉の海と漁業を考える会代表）
美濃輪　やよいさん（元千葉県生活改良普及員）
山口　孝さん（地方公務員）
龍崎　英子さん（千葉伝統郷土料理研究会会長）

コーディネーター　遠藤　陽子（千葉自然学校理事）

６．まとめ：今、郷土料理や食について考えていること

● 現状

＊先人の知恵を掘り起こし、伝える活動をやっている。食文化フォーラムを立ち上げた。
＊伝承活動を進めたいと、子どもを対象に食文化啓蒙事業に取り組んでいる。

＊子どもの頃の母の弁当が原点、子どもたちにいまの食をどう伝えるかが課題。

＊自分達が普段食べているなにげないもの、暮らしに自信を持ち、これを外の人たちに伝えて行きたい。

＊一律の栄養重視の食では、味覚が育たない、

＊千葉の海岸は全国ワースト３、九十九里海岸の砂が失われている。

＊山武郡内の農家のお母さんたちが太巻き研究会を立ち上げ活動してきた。

● 課題と結論　今後取り組むべきこと

＊千葉の郷土料理は多いが、食に対する情熱がうすい。

＊地元では「おかき」の得意なおばあちゃん、まだまだ名産品がある。

＊地元の漁師は、ゴンズイ・ハコフグなどのおいしい食べ方を知っている。

＊地域のおいしいものを集め、　弁当コンテストなどをやって、これをコミュニティービジネスとして根付かせたい。

＊棚田の米がなぜおいしいか？棚田は地すべりの復興の産物、

＊　おいしいものをどう普及するか、それには価値観や経済行為の転換が必要、観光業者は一律の 料理で知恵がない、だからフォーラムを立ち上げた。

食分科会では５月 14 日に大山千枚田棚田倶楽部で開催しました。その昔、私は、農家の女性から昭和３０年ごろまでは「谷津田は米びつ」だったと言う話を聞いて深い印象を受けたのを覚えています。日照が続いても大風が吹いても周りの里山に守られた谷津田というのは、大きな被害を受けることなく安定的に米がとれた田んぼだったのです。

このように、自然と深くかかわりながら、豊かな実りと家族の安泰を祈る暮らしの中で年中行事が生まれ、郷土料理が伝えられて来ました。これを次代に伝えていくにはどうしたらいいか、ということで話しあいました。

まず午前中は郷土料理の体験ということで、みんなで太巻き寿司つくりをしました。太巻き名人の龍崎先生に教わってみんなでつくって、それをお昼にしました。午後は「車座食談義」里山、海とかかわる暮らしの中で生まれ伝え続けてきた郷土料理について語り、次代に伝えて行くために今必要なことについて語り合いました。

先人の知恵を掘り起こし、伝えるため食文化フォーラムを立ち上げて活動している事例やこどもを対象に食文化啓蒙事業に取り組んでいる事例が紹介され、今後も郷土料理を伝えて行きたいというのが皆さんの意見でした。

今、農業改良普及員たちが調査したものを残す努力が必要。昔は集まりがあると「提げ重」を皆で持ち寄ったものだ。もう一度そういうものを取り戻す意味で、食の文化祭などをやったらどうか、子どもに対してはやはり、身体を動かし、おなかがすいた経験をさせ、「うまい！」という感動を体験させたい、などが話し合われました。

（遠藤陽子）

7　里山と芸術分科会

谷津田における人と自然とアートの出会い

日時:5月15日(日)　10:00～15:00

場所:大やぶ池谷津田(千葉市緑区越智町)

『工作ワークショップ～やつだのやはやそうのや！～』

●ドームをつくろう！
竹を使ったドーム作りと間伐規材を利用した大きなテーブル作りを行いました。
・ 講師:横田耕明(グループ2000)

●野草で天ぷら！
大やぶ池のまわりを散策して野草をとり、天ぷらにしていただきました。またチャリカフェという移動式カフェも出現し、参加者に飲み物を振る舞いました。
・ 講師:細川隆・福田洋

●楽器をつくろう！
竹を使って楽器を作り、みんなで演奏しました。
・ 講師:小林正幸(ウッディ工房)

まとめ：この谷津田がたくさんの人に知って、来て、楽しんでもらおう！

● **現状**
・千葉市内に住んでいる方たちにも「大やぶ池谷津」のことがあまり知られていない。
・この谷津田に残土・産廃を投棄しようとする動きがある。

● **結論**
・ この地域のことを、もっとたくさんの人たちに知ってもらう必要がある。
・この谷津は自然豊かな素晴らしい場所。何かこの場所性を活かしたことをしていきたい。
・子どもたちだけでなく、大人たちも取り込むような企画作りが大切になる。
・ 一過性のイベントではなく、地域に根付くような活動を行っていくことで、この場所の継続的な活用が図られる。

● **課題**
・この谷津を多くの人に知ってもらうために、どのような表現が考えられるか

野草の天ぷら

里山と芸術分科会では5月15日に千葉市緑区土気大藪池谷津田を舞台にして創作ワークショップ「やつだのやはやそうのや」というタイトルで野外体験の企画を行いました。当日は小雨のぱらつくあいにくの空模様だったにもかかわらず、途中参加の方やスタッフを含めると約100名の人たちが集まってくれました。小学生以下の子ども達が多く、開会式前から元気いっぱいにはしゃいでいました。午前中は班を二つに分け、机、椅子制作、竹を使った道具作りを行いました。机づくりでは丸太切り、釘打ち、道具づくりでは竹を重ねて縛り、組み立てるという力仕事が多かったので、中心となったのは親御さんやスタッフの方たちでしたが、子ども達もなおサポート役としてがんばってくれました。お昼は野草のてんぷらです。野草は周辺からとりあえず摘んできたもので、ほんとにすごいところに生えていたものばかり、これが以外に臭みがなく、くせがなくあっさりと食べられました。またこの時、私達の企画であるチャリカフェという自転車にお茶などを積み込んで、いろんな所でカフェを開くという装置ですが、これで参加者のみなさんに飲み物を振舞い、好評を得ていました。午後は竹を用いての楽器づくりです。これには親も子も参加者全員が熱中していました。ぱっと見は簡単そうなんですが、なかなか鳴らない、だからこそ楽しく夢中になれるという具合で、みなさんどんどんのめり込んでいました。そのせいか出来上がったものはかなりのお気に入りになったようで、常に手の中にもち、ことあるごとにピーと吹いたりしている人もいました。一度吹くと分かるようです。ワークショップ終了後、また参加したいという声を多く頂いた一方で、このような企画があったことは知らなかったという方も多くいらっしゃいました。
(宮村賢治)

８　里山と医療・福祉分科会

谷津田における福祉の有り方と新たな相互理解や交流の試み

●野外体験:

日時: 5月15日(日) (雨天の場合は5月29日(日))
場所:千葉市緑区土気大藪池谷津田

子どもと何らかの障害のある方々を中心に工作作業を行う。参加者が個々の特徴を認め合い、助け合いながら楽しく活動することにより、地域福祉の在り方を模索する。

竹を使ったドームづくりと間伐材を使った机づくり
建築家・グループ2000代表の横田耕明

野草をとり、てんぷらをする+昼食
参加者は谷津田を散策して野草を採り、随時てんぷらにして食べる

チャリカフェで飲み物を振る舞う
(チャリカフェという移動式カフェ)

竹を使った楽器づくりとそれを使った演奏
ウッディ工房　小林 正幸
里山の仲間たち　林 みね子

８　まとめ　工作ワークショップ・五月の谷津田における福祉活動

● **現状**
・大藪池周辺は医療福祉施設が多い旧農村地域。
・現在の美しい環境はNPO や地元住民の活動で維持されている。

● **結論**
・小雨に100人前後が集合、自然・福祉への関心の高さを確認。
・五月の谷津田を存分に体験。予想を越える活発な交流と創造が実現した。

● **課題**
・谷津田をフィールドにした地域福祉の基盤作り。
・活動が根付くには地道な呼び掛けと定期的な実施が大切。
・今年は夏と秋に行事を予定。

私達は先ほど「里山と芸術分科会」で話をされた宮村さんたちと共に今回のワークショップを行いました。メインテーマを谷津田に置ける福祉のあり方と新たな相互理解や交流の試みとういうことでプログラムを行いました。プログラム内容は先ほど宮村さんが言っていただいたので大体は分っていただけたかと思いますが、机づくりなどでは子ども達を始めとして一生懸命工作に打ち込む姿が印象的でした。この大藪池周辺は医療福祉施設が多い旧農村地域で現在の景観というのは NPO や地元住民のみなさんの活動で維持されております。当日は小雨が降る中 100 人前後の多くの人々が集まっていただいて自然の中での芸術活動と、心身の活性化に関心の高いことを確認しました。

予想を超える活発な交流と創造が実現いたしました。今回のワークショップで谷津田をフィールドにした地域福祉の基盤作りがスタートしたと思います。活動の継続には地道な呼びかけと定期的な実施が大切だと考えるので、今後の予定ですが、今年は夏と秋に行事を予定しております。以上です。

(横田耕明)

９　里山と政策分科会

里山は創造力をふくらませる「場」

里山に子どもたちの声が響く和
　光保育園

お母さんがつくった
プレーパーク　どんぐりの森

千葉市「子どもたちの森」

会場写真

９　まとめ：政策は自らつくっていくもの

● 現状

・都市化で身近な自然・里山が失われて、子どもたちが自然に触れ合う機会が減ってしまった。

・社会とかかわらない、実体験の乏しい現代の子どもたち

● 結論

・思いを実現していくためには、自らが声を出し、場をつくり、人を巻き込み、つながっていく。

・政策は私たち自らがつくっていくもの

● 課題

・社会の仕組みに関わっていくことがなくなっている。自分には関係ないと思っている人たちをどう巻き込んでいくか。

「里山と子ども」という観点から政策について参加者で考えました。三つの事例をまずお話いただきました。
　ひとつ目は周りの里山の中で地域の大人たちをまき込んで子どもたちを育てている自称里山保育園の取り組み。 次に子どもたちを自然の中で、育てたいという強い思いから、自分たちで里山にプレーワークを作ったお母さんたちの取り組み。 最後に、いわゆる都市公園、都市部にある普通の公園ではない、里山を活用した子どもたちのための公園（森）作りを行っている自治会の新たな取り組み。 この三つの事例をもとに意見交換しました。
　豊かな自然の中で子どもたちを育てたいという思いは誰もが望むことですが、現状は自然が失われて、子どもたちが実体験できる場がなくなっています。
　このような中で政策というものを考えた時に、私たちに何ができるのか、やはり思いを実現させていくためには動き出す勇気、自分たち自ら声を出して、場をつくったり、人を巻き込んだり、人とつながり、行政とも連携して、自分たち自身で政策作りに取り組んでいかなくてはいけないというまとめになりました。

（内山　真義）

１０　里山と観光分科会

里山の四季を生かした観光

●第1回シンポジウム

日時:5月21日
場所:我孫子市中央学院大学6号館3F
(634教室)にて
特別ゲストによる講演:
「里山とそのすばらしさ」出演者:中村俊彦
講演:
「里山の四季を語る」 出演者:浅井粂男
グループ討論:
「里山イメージ作成」

会場写真

●第2回シンポジウム

日時:　6月18日(土)12:00から
　会場:「道の駅」ローズマリー公園・丸山町
里山ハイキング　安馬谷の里山をハイキングし
四季の里山を見学し　　ます

6月19日(日)　9:00から
　前日ハイキングした安馬谷の里山を題材に、
里山の価値について語ります。またその価値を
どう観光に結び付けていくかの可能性について
考えます。

里やまの春　浅井粂男　画

10　まとめ

● 現状

・観光に合うよう努力しているもののゴミが多く、癒しにならない場合が多い

・里山のイメージは人それぞれあります。

● 結論

・当事者だけでなく、多くの人手も借りて、幅広い活動をしたい。

● 課題

・里山を見る側と管理する側の意見を調整しながら今後の里山づくりにあたりたい。

私たちは、浅井さんの描かれた里山の四季の絵をみながら、里山と観光についての話し合いをもちました。まず里山のゴミの現状が指摘されました。当事者は努力しておりますが、里山にゴミは多くてなかなか癒しの場にならないというような例もありました。里山に対するイメージが悪いということになります。

里山の保全については、当事者だけで協力してもなかなか思うようにならないことも多く、人出と支援を仰ぎながら、幅広い活動をしたいということでございます。我々としましては、里山を見る側と管理する側の意見の違いもありますので、そういうつなぎ役に徹していきたいと思います。
里山では目だけで楽しむのではなく、時には目をつぶり五感も風の音、風のにおいを楽しんでみたことがあるとおもいます。また里山のお土産としましては、足元に咲いている花の名前の一種類でも、木の名前の一種類でも覚えて帰ってもらえたいと思います。今日の分科会は前夜祭です。本番は 6 月 18 日 19 日と丸山町で行います。皆さんよろしくお願いします。

（横山　武）

１１　里山と水循環

「健全な水循環」 ～恵み豊かな水を子どもたちへ～

●シンポジウム:

日時:5月21日

場所:中央学院大学6号館3F(635教室)にて

講演　佐倉 保夫氏（千葉大学理学部地球科学科）

事例発表

(1)「印旛沼のみためし行動」
三品　圭史氏(千葉県県土整備部)

(2)「名戸ヶ谷湧水と子どもたち」
篠崎　将氏(名戸ヶ谷ビオトープを育てる会)

(3)「手繰川協働事業と畔田での市民活動」
小野　由美子氏(さくら・人と自然をつなぐ仲間)

意見交換会　コーディネーター
瀧 和夫氏（千葉工業大学生命環境科学）

まとめ

会場写真

●野外体験

「親子で体験！船に乗って手賀沼の水調べ・生き物探検」

日時:6月12日(日)10:00～15:00

場所:手賀沼周辺

11 まとめ

● 現状　・印旛沼流域で県民・行政が水環境の　健全化に取り組み始めている

・市民はや谷津田などで汚れた水の入り混じった中で活動をしている。

● 結論　・地域の声が水循環をよくするということに何を望み、何を残すか，合意を得ること

● 課題　・地下水を以下に保つ

雨水の浸透

涵養域の保全…など

・地表に流れる豊かな水辺作り

始めに千葉大の佐倉先生から里山の水循環というテーマでお話していただきました。
雨が降って地下に滲み込み、湧水として出てくるまでの段階のお話しで、地下水の補充源は涵養域に降った雨水で涵養域がとても大切である、また地下水の年齢は様々で一千年を超す水も有るということなどです
事例発表というかたちで、千葉県の方から印旛沼の周域に「みためし行動」で、湧水復活の為の雨水浸透枡の推進、生活廃水の改善、エコ農業の推進などを実施しているという話、柏市にある名戸ヶ谷ビオトープを作る会は「湧水と子供達」というビオトープを通じて子供たちの活動の話。佐倉市にある手繰川を、親水の川づくりとして維持管理していると言う話。この手繰川は、佐倉市と千葉県と市民との協働でやっているということでした。
いま県、市、町、村や県民の方が一緒になって流域の水循環を良くしようという動きが始まっていますが
共通の課題は、地下水をいかにキレイに保つかということで、雨水を汚さずにいかに地下へ浸透させていくかということです。その結果、綺麗なせせらぎとして流れる水を望んでいるわけですが、残されたすこしの斜面林を涵養域として利用することを行政をはじめ県民の皆さんが一体となってじっくりと考え取り組んでゆく必要があります。
　里山保全というかたちで、いろいろと行動されていますが、子どもたちにも伝えていかなければならないのです。健やかで綺麗な水が流れる川をはじめとして、それらを維持するためにバランスの取れた自然環境が残されていくということが大事なのだということを子供たちと一緒になって、体験してゆくことが、結果として里やまの水循環を維持してゆくことになるのではないでしょうか。　　（荒尾繁志）

１２　里山と野生動物分科会

里山の野生動物との共存を考える

●シンポジウム

日時:5月21日
場所:我孫子市中央学院大学6号館5F
(657教室)にて

基調講演　羽山 伸一
（日本獣医畜産大学獣医学部助教授・野生動物学）

パネルディスカッション

・羽山伸一（同上）

・栗原 裕治
（NPO法人千葉まちづくりサポートセンター副代表）
・清水 享
（サージミヤワキ・電気柵研究員）
・後藤 章浩
（帝京科学大理工学部アニマルサイエンス科4年）

会場写真

１２　まとめ　野生動物対策は町ぐるみで

● 現状　・ 外来種:面積の割りに多い外来生物

・ 農産物被害:被害額横ばい。無秩序な対策によるサル被害の拡大

● 結論　地域作りとリンクし、民間をも交えた野生動物被害対策

→ 住民への説明、理解

→ やる気の励起、戦略計画の樹立

● 課題　・ 子ども、女性も含めたさまざまな立場からの　＜地域の将来＞イメージの構築

・ 専門技術者の配置、自然環境管理機関の創設

私達は、今日の午前中に里山の野生動物との共存を考える、というテーマで分科会を行いました。

最初に基調講演として、羽山伸一先生（日本獣医畜産大学獣医学部助教授・野生動物学教室）に 50 分お話を頂き、その後、パネルディスカッションに移行し、4 人の専門家の方々をお招きし活発な議論を行っていただきました。

現状としては、千葉県は外来種の問題が浮上しています。アカゲザルやキョン、カミツキガメやアライグマなどの外来動物の生息報告がなされています。また猿、猪、鹿といった大型野生哺乳類による農作物被害が深刻です。ニホンザルの有害駆除数も千葉県は全国で一位という現状にあります。

本日の分科会のまとめとしては、「野生動物対策は町ぐるみで」。地域づくりとリンクしながら、住民と情報を共有し、やる気を出させたり、民間を交えた戦略計画をたてていくことの必要性。さらに、女性や子どもも含めた様々な立場や視点からの「地域の将来」といったイメージをきちんと構築し、また専門技術者を配置したり、自然環境管理機関を創設するという課題が挙げられていました。以上です。　　（中野真樹子）

１３　里山と文化と伝統分科会

遺跡からみた里山景観

●シンポジウム:
日時:5月21日(土) 10:00～12:30
場所:我孫子市中央学院大学6号館5F（658教室）

趣旨説明 加藤賢三(分科会代表)
●講演「遺跡からみた里山景観」
1. 縄文時代 上守秀明
（(財)千葉県文化センター上席研究員）
2. 弥生～中世 笹生 衛
（千葉県教育庁教育振興部文化財課）
文化財保護室 主任文化財主事）
●意見交換 コーディネーター
西野 元(国士舘大学 文学部非常勤講師)

会場写真

●野外体験
場所:手賀沼および近郊
日時:6月12日(日) 10:00～15:00
備考:我孫子市との共催、水循環分科会との協働

13. まとめ　遺跡に学ぶこれからの里山のあり

● 現状　私たちの暮らしは利便性を追求した結果大きく変わってきた

● 結論　縄文時代から資源循環型社会が作られている。これをもう一度学ぶ。

● 課題　利便性の力べをどう乗り越えられるか

分科会の内容ですが、一つは縄文時代に私達がどのような生活をしていたのかという話です。まず、生活する中で集落ができます。するとゴミが捨てられていくわけですけど、それは文化遺産としては貝塚として理解しているわけですけれども、縄文時代からゴミ問題があって、それをリサイクルという形で上手に利用されてきています。 それでその生活を見ると、それは、資源循環型社会の実現に向けての良いお手本でした。

さらに縄文時代以降、私達の生活習慣の変遷については、このような形で遺跡に学び、これからの私達の生活も送れればと考えているところです。

現在の状態は自分達が利便性を追求することによって環境が変わってきたので、今日勉強したように、縄文時代から循環型社会が作られていることをもう一度学ぶ必要があります。

その時に私達が一度獲得した利便性をどの程度まで理性的に抑えて、持続可能な社会の実現に向けて行動していけるかが課題になるのではと思います。　（加藤賢三）

１４　里山と子どもの健康分科会

化学物質から子どもを守ろう

●シンポジウム

日時:5月21日
場所:我孫子市中央学院大学6号館5F(659教室)

講演
藤原寿和氏
（有害化学物質から子どもの健康を守る千葉県ネットワーク代表）

講演
朝倉法子氏「佐倉からの報告」

会場写真

●シンポジウム

残土処分と森林保全

場所:市原サンプラザー
日時:6月25日(日) 9:50～12:00 見学
13:00～17:00 フオーラム 後援と討論会

１４ まとめ　　化学物質から子どもを守るために、地道な活動を皆でしていきましょう

● 現状

子ども達の間に化学物質による健康障害が着実に増加。しかし、国も県も化学物質の取り組みが遅れている現状である。

日々住民はあらたな情報が流れている。しかし、生活の利便性追求のみに走り、それらのリスクが、子供らの将来に影を落とす実態を追求しようとしていない現状がある。

● 結論

子ども達の教育や過程の中村俊彦で化学物質に関する不足している。
色々な機会を通じて実態に対処する方法を知らせて、いくことが必要と思います

● 課題

世のお父さん、お母さん達に、このあふれ出す有害化学物質を、間違いのない情報として流すことが出来るかを、生活の中の身近な化学物質として、その影響リスクを調査し、多くの市民に知らせると共に、メーカーや行政に対策を提案していくことを考える

「有害物質から子どもを守る千葉県ネットワーク」は［残土・産廃問題ネットワーク・ちば］と連携しているグループです。よろしくお願いします。

昨年、全国の不法投棄の３分の１は千葉県にはいっていると、環境省発表で報道されました。その不法投棄の又３分の１が銚子に入っている。井戸水の電導計検査結果が 1200 を越えているところもあります。保健所の検査で 800 をこえているところもあります。他のところでは死んでしまうといわれている数値です。ペットボトルで料理をするという家もありますが、大変なことです。子どもだってたくさんいます。

そこにまた管理型処分場を作る許可が下りている。昔は利根川のほとりの水田が続く里山が、今は千葉県の北のはずれだからとゴミの不法投棄だらけなのです。どうして一極集中のゴミ捨て場を造るのでしょう。それらの産廃・残土は他県から持ち込まれたものがほとんどなのです。誰にも生活権があります。子どもにはたくさんの未来を生きる権利があります。子どもは大人よりもっと敏感に有害物質を体にとり込みます。

国も県も子供への対策が非常に遅れています。生活の利便さを追求するその裏にアレルギー体質、化学物質過敏症、ぜんそくなどが年々就学児童の健康調査にも増えております。日本の未来を担う子どもにもっと光を当ててもらいたい。（井村弘子）

分科会報告まとめ（中村俊彦）

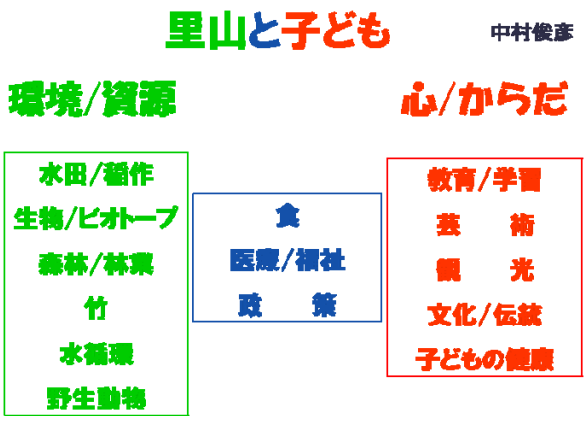
今年の全体テーマ「里山と子ども」を中心に議論を展開してきた１４の各専門分科会の報告が終わりました．

私たち大人がつくってきた今の日本の社会，これは世界でも最も豊かで便利な社会と言って過言ではないと思います．しかし，この社会，子どもにとってはどうでしょう．むしろストレスと危険だらけの社会ではないかと思うのです．

私たちが，子どもの頃には，どんな都会の中でも里山が存在し，子どもにとって，そこは自然いっぱいの遊びと学びの空間でした．しかし，今の子どもたちには，遊びの三間（さんま）が無いと言われます．遊びの空間，遊びの時間，そして遊びの仲間です．私は，子どもたちの遊びについて小学校の先生と調査研究をしたことがあります．
よく言われます，今の子どもたちは家の中でのテレビ・ゲームの遊びが多く，外遊びが少ないといった状況がはっきり示されました．しかし，実際の遊びの状況とともに，遊びの希望調査では，森林，川沼などで自然の中での魚取りや虫取りなどの希望が多かったのです．すなわち子どもたちは，仲間とたっぷりの時間も必要な自然のなかでの遊びがかなわないために，家の中でのゲーム遊びに追いやられてしまっている状態なのです．

この理由はいろいろあると思いますが，自然の中の遊びを危険として，大人がそうさせないこともあるようです．自然の中には，もちろん危険もいろいろあります．しかし，子どものころにケガもしたことのない状態では，おとなになって大きな危険に自分で対処できないことになりかねません．
さらに最近では，自然の中での体験が，人の心，すなわち脳の発達・活性まで影響している状況もわかってきました．外界からの多様な刺激は，五感を通して感じ，これに対応する身体をつくっていきます．この外界からの刺激は，ホルモンの分泌を促し，脳の発達，特に思考・判断を司る大脳新皮質の前頭葉の発達・活性に作用するのです．
里山での遊びを通して，子どもは，子どもの時にしか経験しまた学べないいろいろなことができるのです．自然の中での体験は，人としての成長過程において必要不可欠のものであり，決してオマケではないの．

私たち大人が造った今の都市空間またその社会，子どもの視点からもう一度見直す必要があると思います．そして，私たちの食料や水・空気と言った多様な資源・エネルギーの観点の他に，人の心や健康の面からも里山の価値を再評価し，子どもや孫，そして将来の人々にこの里山を守り，伝えていくことは私たち大人の責務だとおもいます．



１．子どもの視線で現代の大人社会を見る

大人がつくった便利で豊かな現代社会
（都市・情報・経済・モノ）
▼　▼　▼　▼
（人造・思考停止・競争・物欲）
▼　▼　▼　▼
（無生命・脳力低下・いじめ・犯罪）

子どもにとっては貧しく危険なストレス社会

２．子どもにとっての里山の価値を考える

人としての脳（心）と身体をつくりだす
里山での自然体験はオマケではない！

これより、中央学院高等学校生物部　岡発戸　都部
谷津ミュージアム
「四季と昆虫」　の発表を始めます。

はじめに
　千葉県北部には谷津地形が広がっており，その複雑な環境には多くの生物が生息しています。我孫子市では、2003 年に「谷津ミュージアム事業構想」をつくりました。

　この構想は、岡発戸都部の谷津をフィールドに、谷津の自然を構成する田んぼや山林の緑、水辺の生き物、伝統的な農業やくらしの風景など生きた自然と郷土の歴史・文化を感じることができる「野外博物館」づくりをイメージしたもので、我孫子市では、この「谷津ミュージアム」の実現に向けて、手賀沼課や農家の方をはじめ、たくさんの市民の方々に協力を求めました。
我々中央学院高校生物部にも、我孫子市より協力の依頼
を頂いた経緯もあり、我孫子市との協力関係のもとで昆虫調査を行うことにしました。
　調査地にあたる谷津は、我孫子市に現存するものの中では最も大規模な谷津であり、延長は約 1.7ｋｍにもなります。
谷津は昔から薪炭林として利用されてきた台地やその林縁部、田んぼや畑、小川、溜池など、狭い範囲に多くの環境があり、それにあわせて実に多様な生物相が育まれてきた場であります。
谷津はまさに生物の宝庫であると言えるのです。
その谷津で 1 年間調査を行った結果、15 目 153 科 733 種の昆虫を確認し，谷津での記録を累積すると 1153 種が記録されました。
この調査で新たに記録された昆虫は 492 種にのぼりました。しかし、420 種もの昆虫類が再確認されず，減少傾向にある種が判明しました。
　また、環境省及び千葉県レットデータブックに記載されている種に 14 科 22 種が該当したことにより、保護対象とするべき種が明示されました。
　この調査で得たデータを谷津ミュージアム実現に生かせないか？そう思った我々は、今まで蓄積したデータを再度まとめなおし、谷津ミュージアム設立にむけて具体的な利用法を検討することにしました。

季節と昆虫
　調査によって採集した昆虫の目、科、種類を月別に集計し、まとめてみました。
これにより、谷津における昆虫の発生周期や特徴をつかみ、データを観察会などで利用する形にできると考えました。

4 月の記録、
　4 月は、8 目 140 種が記録されました。
注目種は、ハナダカカメムシ、ヒメマイマイカブリ、ギンイチモンジセセリ、ミヤマチャバネセセリが、確認されました。

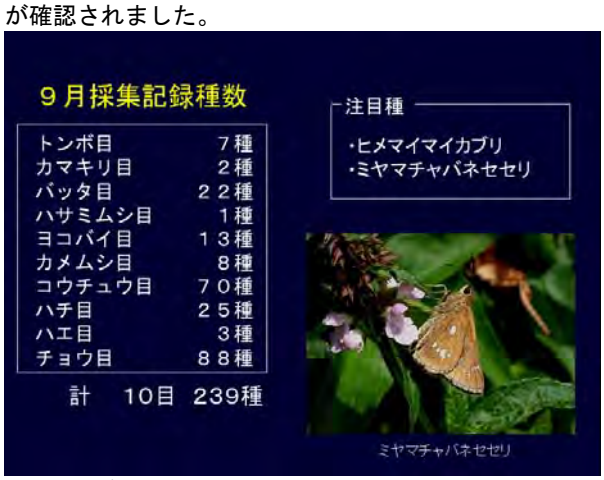
5 月の記録
　5 月は、6 目 43 種が記録されました。
注目種は、ヒゲナガハナノミ、ヤマトシリアゲ、ミヤマチャバネセセリ、アカシジミが確認されました。

6 月の記録
　6 月は、10 目 269 種が記録されました。
注目種は、サラサヤンマ、コカブトムシ、ヒゲナガハナノミ、アオスジカミキリ、クロマルハナバチ、ヤマトシリアゲ、ミヤマチャバネセセリ、が確認されました。

7 月の記録
　7 月は、12 目 372 種が記録されました。
注目種は、ナゴヤサナエ、ヒメマイマイカブリ、コガムシ、ヘイケボタル、ギンイチモンジセセリ、ミヤマチャバネセセリ、ミズイロオナガシジミが確認されました。

8 月の記録
　8 月は、8 目 181 種が記録されました。
注目種は、ウチワヤンマ、ネアカヨシヤンマ、クロスジギンヤンマ、チョウトンボ、
ミヤマチャバネセセリ、ジュンサイハムシ
が確認されました。

9 月の記録
　9 月は、10 目 239 種が記録されました。
注目種は、
ヒメマイマイカブリ、ミヤマチャバネセセリ
が確認されました。

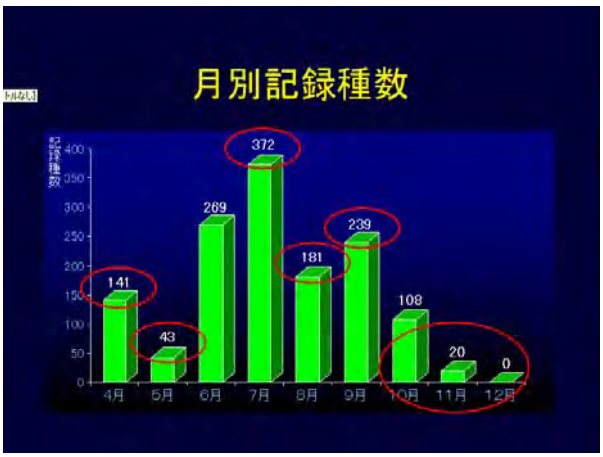


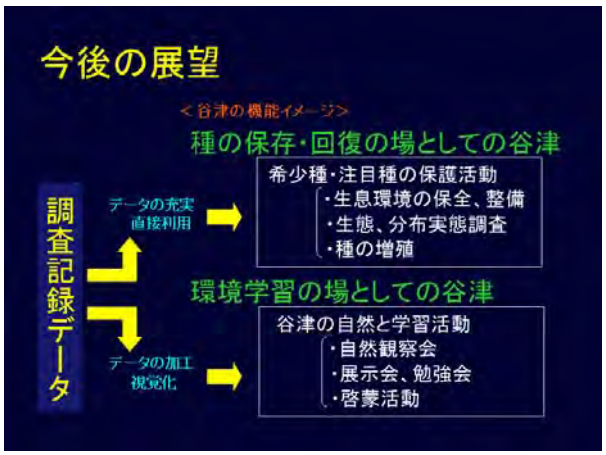
10 月の記録
　10 月は、8 目 108 種が記録されました。
注目種はブチヒゲカメムシ、ヒメマイマイカブリ、ミドリシジミ（卵）、アサギマダラが確認されました。

11 月の記録
　11 月は、5 目 20 種が記録されました。
　11 月には注目種は見られませんでした。

なお、１２月には記録がありませんでした。

月別記録
　このように一年間の記録を月別にまとめなおしてみると、記録種数のピークが、春・4 月、夏・7 月、秋・9 月にあることがわかります。
基本的に調査対象は成虫であり、このグラフは月別に見られる成虫の記録種数をまとめたものと言えます。
　4 月は前年からの越冬個体と、蛹越冬で春に成虫になる種とが一斉に活動を始めるため、次の５月に比べ、記録種数が多くなっています。
ツマキチョウやビロウドツリアブなど、春にしか見られない種も多く見られます。
　それに対し 5 月の記録が極端に少なくなっているのは、4 月に見られた個体が産卵を終え、一斉に寿命を迎えるため多くの種において端境期となるためと考えられます。
　夏のピークである７月は、谷津の一年間で最も多くの昆虫を見ることのできる季節です。





梅雨時期である６月、植物の成長に合わせ、卵越冬個体や春に産卵された個体が羽化を始め、種類数が大幅に増加してゆき、７月にはそのピークを迎えます。
注目種であるヘイケボタルやネアカヨシヤンマなどが見られるのもこの時期です。
８月に入ると種類数が７月の半分以下にまで落ち込んでしまいます。これは６月～７月に活動した種の世代交代に入るためであると考えられますが、生存しているものの、暑さをしのぐために休眠に入る種が多くいるためであると考えられます。
夏の盛りには意外と昆虫が少ないことがわかります。
９月を迎え、気温も落ち着いてくると秋の昆虫の最盛期となります。
夏に産卵された個体が羽化を始め、卵越冬の直翅類など秋の鳴く虫もこの時期に成虫を迎えます。
夏の間、休眠していた昆虫も活動を始め、記録種数も６月程度にまで増加します。
その後、１０月１１月になると気温の急激な低下などによって越冬に入るものや死亡するものが増え、谷津で見られる昆虫は急激に減少し、冬を迎えます。
このように採集記録をまとめ直してみたことで、岡発戸都部の谷津で見られる昆虫の成虫発生のパターンは年３回であることが判明しました。
谷津の中を歩くと、なんとなく昆虫の多い時期、少ない時期などを感じることがありましたが、このようにグラフとしてまとめてみることで全体的な昆虫の消長がわかり、今後調査や採集、観察会などを行う上で参考にすることができるようになりました。

今後の展望
今後、谷津の調査によって得られたデータをさらに充実したものとしてゆき、その中で確認された希少種、注目種の保存、回復の場として谷津を見てゆくことももちろん大切ですが、それと同時に「環境教育の場」として谷津を見てゆくことも大切であると考えます。
今後谷津の調査によって得られたデータの種類数を追加できるように調査を続けるとともに、さらに標本、生態写真の充実にも重点的に取り組み、データを視覚的に利用できるものへしてゆこうと考えています。
採集記録、標本、生態写真を充実させ、谷津に棲む昆虫の展示会や発表会などに積極的に参加することにより、より多くの方に谷津を知ってもらう機会になればと考えています。
また、地域の小中学校を対象として、谷津の自然観察会や勉強会などを企画し、地域住民の環境学習の場としての谷津作りについて積極的に取り組んでゆきたいと思います。
それに伴い、谷津内の環境別、季節別の昆虫分布図を作って、自然観察パンフレットや案内パネルのような物の作成も視野に入れています。
希少種、注目種の保護活動やビオトープ作りなど、まだまだやりたいこともたくさんあります。
これまでの４年間の調査で、だんだん谷津の自然環境が理解できるようになってきました。
これからも谷津の美しい自然を維持するとともに、我孫子市や地域の住民の方々と協力しながら、一つ一つ着実に、谷津ミュージアム完成に向けて活動してゆきたいと思います。

中央学院大学学長　大久保皓生様のお話し

本日は里山シンポジウムを本学で開催して頂き、大変光栄に思っております。

先程来、各分科会で熱心な討議がなされておりますが、それぞれの経験のなかから得られた尊い議論として大変貴重なものと拝聴いたしております。そこには、自然と人間の共生という大きなテーマが存在しているのではないでしょうか。

自然と人間の共生という課題は、21 世紀の最大の課題であると思いますし、オーバーな言い方かもしれませんが、人類存続に係わるおおきな課題であろうと思います。こうした問題に皆様方が率先して参加され取り組まれているわけでありまして、心からの敬意を献げたいと思っています。そしてまた、本学といたしましてもできる範囲内で協力できれば幸いであります。本日のような催しは、21 世紀の人々の幸せのためのメッセージであり、次の世代への送りものになってほしいと願っています。

本学は、かねがね、このようなメッセージの発信の場所として、また地域の皆さんへの貢献ということをひとつの使命としてまいりました。昨年は、山階鳥類研究所、中央電力研究所をはじめとして多くの市民団体そして市民の皆様とともに手賀沼学会を設立し、そのお世話を致しております。

これは、地元我孫子市の財産である手賀沼を、何とか再びきれいな湖にして市民に愛され親しまれる存在として子孫に残していきたいと願って設立したものであります。幸い多くの市民の方々から賛同が得られ、会員になって頂いております。かつては風光明媚な湖として愛された手賀沼をあらゆる角度から見直していくことによって自然の尊さ、そのあり様が見えてくると思っております。

本日、皆様方が論じられておられる里山というものも、手賀沼を愛する心と相通じるものがあると感慨を深くした次第であります。こうした活動を通じて、また私共も参加させて頂き学ばせていただいて、地元の皆様方に少しでもお役に立てることができれば、大変嬉しく思っております。

これからも益々発展されますよう心からお祈りいたしまして、私の挨拶に代えさせていただきます。

本日はどうも有難うございました

（司会） 副会長 小西由希子

パネルディスカッションを始めさせて頂きます。

今までは「谷津田」といっても誰にもわかってもらえなかった、しかし里山条例ができて、徐々に「谷津田、知ってるよ」という人が増えてきました。里山に関わる方々も、年々驚くほど数が増えてきたという現状があります。その中でやはり、谷津田、里山の保全についての議論もあちこちでされるようになって、関心も高まってきたと思います。これはある意味追い風だと思っています。しかしこの追い風のなかで、これから私たちはどうしていくのか、が問われているのではないかと思います。

シンポジウムも2年目を迎えて、私たちはこの活動の足腰をどうしっかりとしていくのかが問われているのだと思います。里山と関わろうとする中で私たちは、これまでの既成の価値観を転換していかなければならないとか、自分達の生き方そのものも見直していく必要があるのだと感じることがあるわけですが、今新聞などを賑わしている子ども達の様々な問題、そのようなことにどう対処していくかということで働き方そのものから見直していこうと、今千葉県では次世代育成支援行動計画というものをつくっています。

これは各自治体、或いは300人以上の事業者がみんなつくらなければいけないと義務づけられたもので、千葉県でも策定しています。新しい地域力、地域力を「ちから」と読ませておりますが、それこそが必要である、解決の鍵ではないかと言っております。その中で大切なのは、人づくりと関係づくりといわれている。私たちも里山保全活動の中で、その人づくり関係づくりを実効性の高いものにしていくためにはどうしたらいいかということで、今日は様々な活動をされているパネリストのみなさんにお話いただいて、私たちの今後の活動の参考にしていけたらと思います。よろしくお願いします。

ではまず、それぞれの方の活動の取り組みについてお話いただきたいと思います。まずは、開催地であるこの我孫子市の市長の福嶋さまから、福嶋さまは、38歳で市長になられ、コミュニティービジネスの育成とか、市の職員の採用に民間試験の制度を用いたりとか、ユニークで先進的な取り組みをされています。これまでの実績や経歴をうかがいますと、学園祭のいざこざで大学を除籍させられてしまった経験をおもちになるなど、戦闘的な方のように感じられますが、実は非常に物静かな方です。　今日は我孫子市さんが取り組まれている子どもの施策、谷津田の保全についてお話していただきたいと思います。

我孫子市長　福嶋浩彦

どうも皆さんこんにちは。ご紹介いただきました福嶋です。ようこそ我孫子市においでくださいました。

我孫子市、字を見ますと「われ、まご、こ」と書くんですね。私たちの子どもや孫の世代に豊かな自然環境を大切な財産として伝えていこうということを考えて取り組んでいます。

今日は「里山と子ども」というテーマですから、まず子どもについてお話したいと思います。我孫子市は昨年「子ども総合計画」という計画をスタートさせました。　我孫子市の行動計画を含めたもので他の自治体より一年早くスタートさせたということになります。

この行動計画には300以上の事業を位置づけています。つまり教育委員会などの子どもに直接かかわる部署だけではなくて、公園の担当あるいは商工の担当など市の全ての部署が横に連携して、また地域と一緒になって子どもたちが心豊かにそして自分らしく、自分らしくということを強調しているのですが、自分らしく育っていけるように応援しようという計画です。

ひとつ気をつけたのは、できるだけ子どもの視点に立っていろんなことを考えていこうということです。「青少年健全育成」という言葉は一切使わないということで始めました。本来健全育成というのは悪いことではないのでしょうが、なんとなく上から子どもを見て規制していくみたいなニュアンスがちょっと出てくるので、そういう言葉は一切使わないでいこうということにしました。

それからもうひとつの柱は、子どもたちにできるだけ豊かな自然体験、社会体験、生活体験を提供できる地域を作ろうということです。文部科学省の調査で、朝日が昇るところ、夕日が沈む瞬間を見たことがない子どもが50パーセントをこえたということです。

それからこれは聞いた話ですが、子どもたちをつれて山へキャンプに行ったんですが、山には平地で見るのとは全然違うすごい星空が見えるんですが、ある女の子が下しか見ていない、地面しか見ていないというのです。何で下ばっかり見ているのと尋ねたら、「空にじんましんが出ている、気持ち悪い」というのです。このくらい子どもたちには自然体験が、実体験が少なくなってきている。そういう子どもたちに生の体験を提供できる地域になろうということを大きな目標にしています。

いろんな事業を考えていて、今募集しているのは、2泊3日なんですが子どもたちが他の学校の友達と一緒に泊まりながら学校に通おうという宿泊通学の取り組みです。それからこれも今募集中なんですが、今年8月に筑波山から我孫子まで、5泊6日でキャンプをしながら子どもたちだけの力で旅をしようという、チャレンジウォークという事業です。

小学5年生から高校1年生くらいまで、6,7人でグループになって筑波山から我孫子まで歩いて旅をする。泊まる所は自分たちで探して、テントを張って、食事も自分たちで作る。コースも自分たちで考える。安全のためにガード役の大人が1人はつきますけども、たとえ道に迷っても一切口は出さない、ほんとに生命に危険があるとき以外は見守りに徹するという取り組みです。

市の主催にしましたから、万一事故があったら市長が責任を取るということで、ちょっと思い切った取り組みですけれども実施することにしました。

もうひとつ重要なのが広報、2ヶ月に1回市の広報の1ページを全部子どもたちにあげちゃう。子どもたちが自由に編集して作っていいよ、何をやってもいいよ、自分たちの学校の紹介が多いようですが、自分たちの夢でもいいし、我孫子市をこうしたい、こんな町にしたいということでもいいし、大人に言いたいことでもいいよということです。編集の感じも違うし、手書きのページが出てきたりもする。

先程中央学院高校の皆さんが紹介してくれた谷津ミュージアムのそばには子どもの泊まる事のできる拠点を作ろう、谷津ミュージアムを中心とした一帯のエリアを子どもたちがいろんな体験ができるゾーンとして位置づけようということをやっています。

〈以下は写真紹介しながら〉これは航空写真ですが、実は隣に我孫子ゴルフ場があります。バブルの時にできたゴルフ場ではなくて、日本のゴルフの創成期にできた伝統あるゴルフ場です。

いろんな生き物の生息場所、それから私たちが自然と出会う場所、自然から学ぶ場所、そして自然とともに生きる空間を創り出す場所という位置づけをしています。これは全体の整備計画です。

これはホタル・アカガエルの里ですが子どもたちが観察している様子ですね。

自然を楽しむ子ども達

湿地部分の観察デッキ

それからこれは水田に水を張った所に鳥が来ている様子ですね。

先程説明ありましたように谷津ミュージアムというのは別に建物をつくったり人工的にやるものではなくて、谷津の自然を丸ごと保全して昭和 30 年代の農村環境を復活させよう、ということです。

整備前のコンクリート護岸

谷津ミュージアムの真ん中をコンクリート張りの水路が流れています。これを多自然型の水路に変えていくということで、まだモデル的に一部分やっただけですが。

これは工事中の写真です。これはコンクリートを撤去し、多自然型の護岸に変わった状態です。

現在の多自然型護岸

これは一応工事が終わったところです。これで多自然型の水路が完了したというわけではなくて、これがスタートで豊かな環境を地域の方と一緒に作り出していこうということです。これは谷津ミュージアムの会。市民の方と市で一生懸命谷津ミュージアム作りを進めていく母体として作り出した会です。それから谷津祭りというのを開催したんですが、子どもたちもたくさん遊びに来てくれました。これは地元の農産物を使った豚汁を食べているところ。

谷津学校　ビオトープづくり

これは谷津学校を開いているところです。
それからこれは放棄された水田を再生、復元しようという取り組みです。ちなみに、谷津ミュージアム、市が全部買い取ってやるなんてことはできません。

どうしても必要な所は用地取得することもありますが、ほとんどが農家の皆さんと市民の皆さんと一緒に進めていくということです。農業者の方が谷津ミュージアムの中で水田をやっていくときは1㎡20円、米作りはしないけれども水だけ張って管理をしてくれるという人には半分の10円、補助するというのを制度化しています。
それから谷津ミュージアムの周りには、キャンプ場があったり、緑を中心とした市の公園があったり。

五本松運動広場というのは陸上トラックとサッカー場があるんですけど、スタジアムでなくてこんなふうに緑に囲まれた中にあります。これは実は企業のスポーツ施設だったんですが、企業が手放して墓地になる予定でした。墓地も必要なものですけれど、ちょっとここは墓地ではもったいないなということで市が買い取っていろんな展開をしようとしています。

これも運動広場の中なんですが、建物が見えます。もともと企業のスポーツ施設だったときのクラブハウスです。ただもう老朽化しているので、倉庫として使っています。これを直すことも検討したんですけど、かえってお金がかかりそうだということでこれを壊して子どもの拠点を作ることにしました。

今年から計画作りに入りますが、計画を作るのももちろん子どもたちに参加してもらって、拠点を作るのも子どもたちと一緒にレンガを積みあげて、一緒にやりたいと思っています。ありがとうございました。

（司会）次に呉地正行さんにお話頂きます。今日は宮城からお越し頂きました。もともとは神奈川県のご出身ということですが、雁に魅せられて宮城に居着いてしまったという「変人」です。なんと今から34年も前の、昭和46年にできたという「日本雁を保護する会」の会長さんをしていらっしゃるということです。それでは呉地さんお願いします。

（ゲスト）
日本雁を保護する会会長　呉地正行

神奈川県生まれ．東北大学理工学部卒業、現在，宮城県若柳町在住．日本へ渡来する雁の保護運動に携わり，宮城県の伊豆沼や蕪栗沼では，地元田尻町や国，地域住民等を介して市民参画型の自然再生運動や地域起こしを実践．特に，最近の循環型農業や生物多様性保全の水田の新たな展開として注目される「ふゆみずたんぼ（冬期湛水水田）」の取り組みにはその発端を開いた一人．さらに，里山・田んぼを自然を体感する場，また親子がふれあう場としての視点で教育的活動にも携わる．

多様な人々が一緒にやろうというのはなかなか難しいことです。宮城県の蕪栗沼での成功事例を参考に、どうすれば様々な人たちが一緒に活動できるのかというのをご紹介したいと思います。

これは1998年までは田圃で、現在は沼に復元され、蕪栗沼の一部となった「しらとり地区」とよばれている地区です。

ここの話をしたいと思います。蕪栗沼周辺には沼があり、まわりに水田があります。

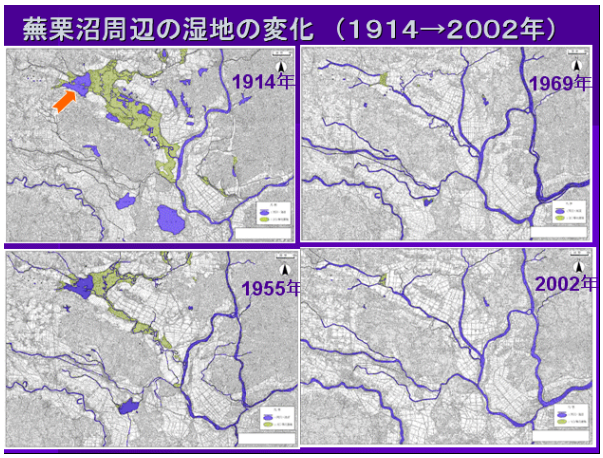
千葉県と宮城県は、広い田圃、そして.沼があるという点ではその環境が非常に似ています。

現在この蕪栗沼は日本有数の雁の生息地となっていますが、ここの雁たちは昔は千葉県の利根川周辺にいました。その後千葉県の環境が悪くなり、そこにすめなくなったため、宮城県に追い詰められてしまいました。

これは蕪栗沼の風景です。左のほうの台形の形をした区画で、100ha あります。

それから右側の長方形の区画は、しらとり地区と呼んでいますが、水田として使っていたものを現在は沼に復元したところで、面積は 50ha あります。これが 1914 年の蕪栗沼周辺の地図で、矢印で示している所が蕪栗沼の付近ですけども、蕪栗沼も大きく、またそれ以外にも沼と湿地が沢山ありました。

それが 1955 年にはだいぶ減少し、1969 年にはその多くが消滅し、現在では小さくなった蕪栗沼がかろうじて残され、それ以外は全て姿を消してしまいました。このように過去 100 年の間に湿地環境が急激に消えてしまったことが分かります。



消えた湿地が何があったのかというと、主な部分が水田に変わりました。どのくらいの湿地が消えたのかというと、100 年間で日本全体で 61%です。湿地の面積が 100 年前全国で一番広かったのは、北海道、次に青森、宮城、千葉、茨城と続きます。

千葉県、宮城県も湿地が非常に多かったんですが、そういうところは湿地の減少率も非常に高いんです。宮城県が 9 割以上で、千葉も 9 割、湿地が消えています。

湿地がどんどん消えていく中で、特定の残された湿地に生き物が追い詰められてきたことが、雁の分布変遷を見ると良く分かります。

蕪栗沼の場合、幸い全部なくならずに残されてたので、面積はだいぶ狭くなりましたが、多様な生き物が今でも棲んでいます。

冬になると雁たちがたくさんやってきます。それからこれらの水鳥を食べ物にする鷲・鷹の仲間も多く、16～18 種類もいます。さらに水の中にはゼニタナゴという希少な淡水魚もいます。

今、ブラックバスの影響できわどい状態になってしまいましたが、その他にも多様な生き物が棲める湿地です。

これは現在の蕪栗沼の風景です。非常に平らで海抜が 3 メートル位しかないんですね。洪水の常襲地帯で沼周辺の田圃を含めて遊水地として管理されています。

この「蕪栗沼遊水地事業」は昭和 46 年に始まりました。遊水地事業というのは堤防で周りを囲み、その中の環境はいじらず、恒久的な設備は作らないので、基本的に沼と周辺の田圃の環境は残されるということでその点は安心していたんですが、ある日事件が起きました。沼を全部 1m掘り下げてしまおう、という計画があることがわかったんです。宮城県がやるというんです。

なぜかというと、沼に土砂が流入堆積し、沼の遊水地としての容量が少なくなってきている、だから 1m 全部掘るというのです。これが予定通り行われると沼の環境が全部消えてしまう。

そうすると当然、小さい生き物から、蕪栗沼の環境

に依存しているいろいろな生き物が全て消えてしまう。これを何とかしなければいけないという大きな課題ができました。

この話を詳しく話すと、非常に長い話になるので、今日はしませんが、この計画を中止させるために次のようなことをしました。まず地元では、大多数の人がこの浚渫計画も蕪栗沼という場所がどこにあるのかもほとんど知らない、ことがわかったので、

まず現地にいろんな人を連れて行こう、ということになりました。いろんな人というのは各分野で蕪栗沼を残すために力になってくれそうな人たちです。そして「蕪栗沼探検隊」というのをつくりました。名前もあまり硬いものせず、楽に行こうと。その「蕪栗沼探検隊」がその後発展的に解消して、現在の NPO 法人ぬまっこくらぶになりました。

まずこれらの人たちが実際に蕪栗沼を体感し、沼の豊かさを感じ取る、その上でどうするべきかということをみんなで話し合いました。同時に、これは地元だけの問題ではなく、上からの働きかけも必要だろうということで、この問題に関心を持つ国会議員の協力を得て、国会でも議論してもらいました。

実は蕪栗の 7,8km 北に伊豆沼という沼があるんですが、そこは結構いろんな人が来るんですが、伊豆沼の視察を短縮して、「もっと面白い所があるから行きましょう」といって蕪栗沼につれてくるんですね。見た人は「良いところですね」というんですが、「実は全部浚渫されて消えてしまうんです。」と言うと、「これはなんとかしなければいけない」ということで、そういう中からいろいろ協力してくれる人を探し当てました。

これは県の事業ですけが、国からの補助が 55%あって、建設省が「うん」と言わないとできない事情があることもわかりました。その建設省が国会答弁で、「全面浚渫はしない」と発言し、その一週間後に宮城県も計画を変更し、全面浚渫は行わないことになりました。

それをきっかけに流れが大きく変わりました。まずこれまで県と話をする場が全然ないということが、こういう問題を生んできたという教訓から、県に対して県と関係者が話をすることができる場をつくってくれという要望をしました。

それを受けて県のほうが、「蕪栗沼遊水地懇談会」を設置してくれました。これはただ形だけの懇談会ではなくて、本音の議論を行政と地元の各種団体が行い、その中から問題を解決していこうというものです。

この中で、私たち NPO は、県が計画を策定する前にどんどん提案を行い、それらの多くが県がまとめた環境管理計画の中に反映され、3 年目に「蕪栗沼遊水地環境管理計画」がまとまりました。

表紙は宮城県の名前になっていますが、中味の多くは私たちが提案したものが反映されているんです。こうやれば、自分たちの思いを将来計画に反映させることができるんだなあと、を実感しました。

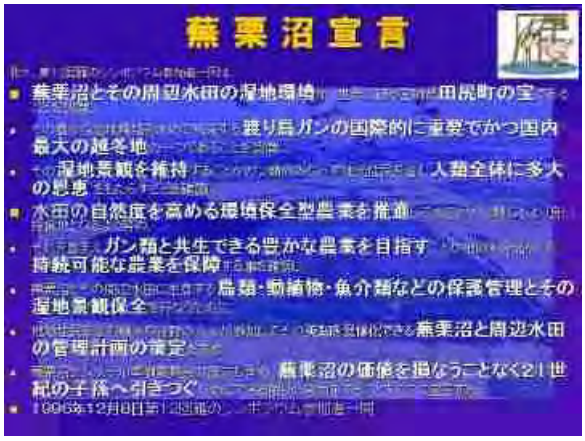
こういうなかで、行政も地元の関係者もみんなが関わる形で問題を考える仕組みができました。それを踏まえ、様々な取り組みが行われています。

行政の問題、それから蕪栗沼の遊水地の管理、自然保護、環境教育、いろいろありますが、蕪栗沼のように水田地帯での取り組みを行うときに、一番の課題はいかに周辺の農業者の協力を取り付けられるかということです。

農業者にとって鳥は稲を食う害鳥で、そんなの要らんという人が圧倒的に多く、現在でもそういう人がいるわけですね。

そういうなかで、どうやったら農家の意識を変え、雁
と仲良くすることができるのかが重要な課題となります。雁という字なんですが、ひとつの屋根（厂）の下に,人（イ）と鳥（隹）が一緒に、共生しているんですね。こういう環境をつくっていこうと。農家の人には、雁を追い払うより、雁を利用し、雁のいる物語を付加価値とした農業を行ったほうがうんといいよというように、話をするなかで、農家の方たちもだいぶ流れが変わってきました。

そういういろんな立場の違う人がいるなかで、共通の目標をつかむために、雁のシンポジウムを行い、蕪栗沼宣言のなかで、みんなの目指していくものを、宣言して取りまとめました。



これは 1996 年のものなんですが現在もこの中のかなりのものは、具体化する方向に動いているので、何を目指していくのかを示して、それに向けて活動していくことは非常に大事なことだと思っています。

この中にはいろんな取り組みがありますが、2 つ大きなものがあります。ひとつは、しらとり地区の水田の 50ha の水田を湿地に戻すことができたことです。また最初は 1 億円以上かけて、沼としらとり地区の間にコンクリートの越流堤防をつくる計画でしたが、しらとり地区水田は沼に復元したんだし、現在の土の堤防のままでいいだろうという議論を行い、結局県が遊水地の設計変更を行い、話し合って計画変更し、日本で初めての土の全面越流堤防にすることができました。

湿地に戻したしらとり地区はその後どうなったかというと、2,3 年後には雁たちをはじめとした水鳥たちのねぐらになりました。

現在ではある意味では沼自体よりも重要な、ねぐらの機能を持つようになり、年々湿地らしい環境になってきました。しらとり地区で行ったことは、単純に水を張っただけなんですね。自然に対して人間はあまりごちゃごちゃ考えずシンプルに関わり、後は自然の力に任せばよいわけです。

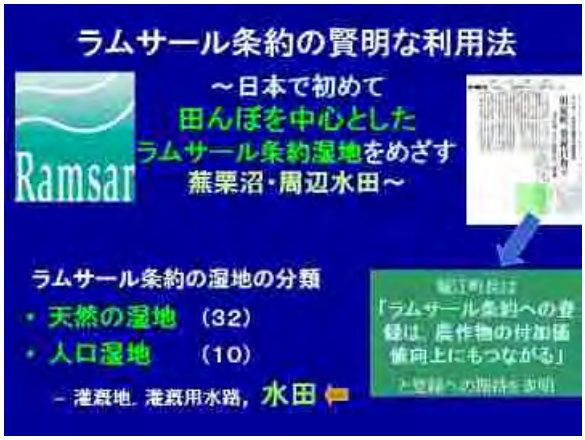
しらとり地区での取り組みにより、水を張るだけで田圃を水鳥の生息地にできるということがわかってきました。それを今度は実際に使っている田圃で始めました。

このように冬の田圃に水を張ると水鳥がたくさんやってきます。これは農業にとっても、その糞の施肥効果があったり、雑草が生えない抑草効果があることがわかってきて、最近では新しい農法としてもだいぶ広まってきました。

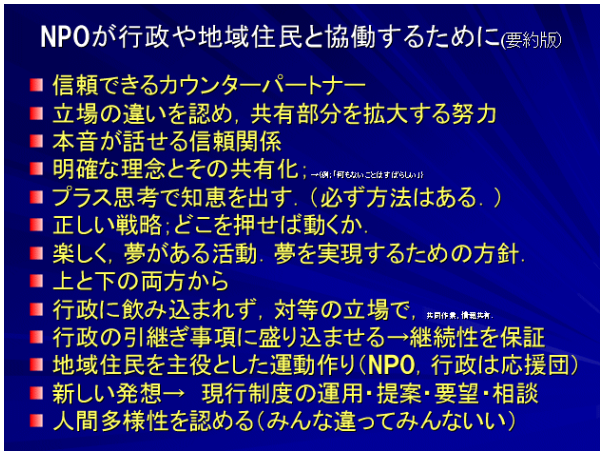
またふゆみずたんぼの面白いところは、これが単に環境を生かした農法だけではなくて、そこに夢が描ける、物語があるというところです。そんなところが面白くて現在では全国にかなり広がってきています。

これはれは宮城県知事のホームページ、2005 年 5 月 17 日版ですけども、ついに宮城県知事も自分のホームページに「『ふゆみずたんぼ』は、おもしろい」、「まずは、面白がるところから、何事も始まる。良ければやる、悪いところは直してみる。」と、言い出して、宮城県が県全体として重点施策として取り組むことになりました。

そして来週、一回目の勉強会をやることにしているんです。（その後県庁内の各部局を横断して、ふゆみずたんぼワーキンググループが立ち上がり、宮城県のアンテナショップは池袋東口にでき、ふゆみずたんぼ米コーナーもできました。）



いま蕪栗沼はラムサール条約湿地をめざしています。ラムサール条約の決議を地元の環境を活かした農業活動の指針として利用するために、田んぼを中心としたラムサール条約湿地という前例がない新しい取り組みをめざしています。広い田圃を中心に登録し、ラムサールを環境農業施策を積極的に誘導する枠組みとして活かそうと考えています。



最後に私たち NPO が、行政や地域住民の人たちと一緒にどのようにやっていけばいいかというのをまとめたのがこれです。

・信頼できるカウンターパートナーを増やすこと
・違いを認めた上で共有部分を拡大する努力、本音が話せる信頼関係をつくること、
・理念の共有化、いつもプラス思考で考えること、どこをどう押せば動くかということ、
・楽しい夢ある活動・夢を実現するための方針、
・下からの動きがあって上も動く、両方の動きが必要、
・行政には飲み込まれずに対等の立場で接する、行政の人には必ず引き継ぎ事項に入れるような事をしていく、そうしないと、人が変わると消えてしまう、
・地域住民を主役とした運動作り、新しい発想で現行制度を運用していく、
・人間の多様性を認める、いろんな違いを持った多様な人を受け入れるということが大切ということです。

（司会）ありがとうございました。それでは次に鈴木眞廣さんにお話頂きます。
鈴木さんは富津市に鎌倉時代から続くお寺の住職さんです。海と里山に囲まれた保育園の園長さんもされていて、それが本業なんですが、その保育園の修理の時は大工さんにもなるということで、面白いお話が伺えそうです。

では、よろしくお願いします。

（ゲスト）
和光保育園園長　鈴木眞廣

1952 年生まれ．大正大学仏教学部仏教学科真言学専攻卒業．現在，社会福祉法人「わこう村」和光保育園園長，富津市の真福寺副住職．富津市小久保に在住し保育士の妻と３人の子ども（保育士の長女，大学４年生の長男，高校２年生の次女）を持つ．全国私立保育園連盟研修部長，千葉県保育専門指導員，富津市 PTA 連絡協議会会長を歴任し，現在，千葉県民間保育振興会副会長，千葉県健康福祉アクションプラン２００３，２００４策定作業部会委員，千葉県次世代育成支援アクションプラン策定作業部会部会長として千葉県の教育・福祉にかかわる．

この3月までに県民が参加して作業しまして次世代育成支援向上計画を県が作成いたしました。
全国津々浦々皆さんお作りになられたのですけれども、国が示した示思惟というのがありまして、そこにもれなく色々な事がつまっている示思惟があるのですが、千葉県らしさということをきちんと書き込みたいということで、皆で作業した結果、国には無いものが千葉県には入ったんです。
それはなにかというと「子供の参加、参画」ということで子供のきちっと社会に対する参加、参画を盛り込んでいく事が何より大事だということをそこのなかに書き込みました。
子供の人権条例というものを作っていかない？という話もそこの中から出てきています。それからもう一つの千葉県らしさというのは、先程お話がありましたような地域をもう一度 21 世紀に再生するということがものすごく大事で、それをしないとこれからの日本はありえないということで、地域力と書いて「ちから」と読ませているのですけど、そこのところを教育の大事なポイントに私たちはしたんです。
今日はその資料がここにありません資料なのでまたの機会にぜひ読んでいただきたいと思います。
私達は今の社会が広義化すればするほど何か社会の仕組みがすごく複雑になってしまって、子供がこういう原因があってこの原因にどうやって人が関わったらこういう結果になるかを、途中のプロセスが非常にシステムとして見えにくい社会に生きているなと思いますね。
子供なりにこうすればこうなるっていうことの見通しがつけられるような経験を子供時代にいっぱい経験しとくってことが大事じゃないかなって僕は考えました。
で、そういうときにやはり私たちが、その戦後の高度経済成長のしくみよりも、先程からいろいろな方がお話されているんですけども、例えば縄文時代の狩猟採集民族的な生活とかですね、あるいは農耕的な、畑を耕したり、あるいは山に入って木を切ったりですねそういう時代の生活っていうことが非常に子供にわかりやすいっていうことがありました。
それでそういうまず縄文時期でありたい、それから第一次産業的な生活の中に子供をおきたいということを私たちは保育の中で大事にしようということにしました。
それともうひとつは、いま働き方が非常に過酷になっておりまして、保育時間がどんどん長くなってきております。私どもの保育園は田舎の保育園で、まだまだ保育時間といっても短いほうかもしれませんが、それでも朝 7 時から夕方 7 時までの 12 時間の保育でお子さんをお預かりしています。
で昼間の 12 時間が子供にとってどうなのかっていうと、学校の教室で授業をうけるっていうような 12 時間じゃとても持たないなっていう風に僕考えるんですね。それでできるだけ学校の下に応じてくるそういう生活の場所じゃなくて、家庭の延長として 12 時間ができるだけストレスにならないようなそういう保育園が用意できたら子供たちにとっていいんじゃないかなと考えたわけです。

で、その中でたまたまうちは裏山がありまして、里山保育園という風には意識していなかったんですけど、毛利さんがうちの保育園に来てですね、ここは里山保育園だねという言葉を使われて、改めてああうち

は里山保育園だったんだなと思った次第です。そんなことで普段水と空気のように、あって当たり前でです。
　里山のありがたさをしみじみ考えながら暮らすっていうことをあまり意識してこなかったんですけど、その言葉をいただいてから、あらためてああ私たちは里山の力を借りながら子供と一緒に生活し、子供と一緒に大人も育てられているんだなということを感じております。
　今日はそんなことをちょっと写真で紹介できたらなと思っております。
　写真を写す前にちょっと自己紹介なんですが、うちの保育園は今から 49 年前にですね四街道というところから兵士の食堂だったのを払い下げて移築して立てた保育園です。
　43 年使いましたが雨漏りがだいぶひどくなりまして、最初のうちはいまどきおうちの中で雨が降ってくるなんて珍しいですね、といって雨漏りを楽しんでおりました。
　そのうち楽しんでもおられなくなりまして保護者がですね、園長このままでは園舎が腐っちゃうよといわれてですね、それじゃあ直さないといけないねということで施設整備をしたんですけど、いまだに雨漏り保育園の理念は大事に引き継ごうということで、毎日保育園の歌なんですけど「雨漏り保育園」というのを園歌にして歌っております。最初にその歌を 30 秒ほど歌わせていただきたいと思います。

「あめのひだいすき　あまやどり　みんなみて
みて　うえをみて　あめのしずくがおちてくるよ
いつものおとがなりひびく
　ぽっぽ　ぽぽぽ　ぽぽーぽ　ぽちゃん
　ぴっぴ　ぴぴぴ　ぴぴーぴ　ぴちゃん
　だってここは　だってここは　あまもりほいくえん」

　時間がないので写真のほうに行きますが、写真のほうは説明しながらまわしてると時間がないのでただただ見ていただくということにしたいと思います。
　写真の順番なんですけど、一番最初に泥んこと水濡れは人間という存在に子供を返してくれるというおもいで、泥んこ遊びと水遊びをしています。

それからお話したようにまずは縄文人でありたい、農耕民族でありたい、というあたりの活動を写真で見ていただきます。その次に自給自足への憧れということでちょっとまねっこのような自給自足をしてみました。

　それから最後のほうで、命と向き合うということで、近代化されて食べるものが町の外から加工されてくるんですけど、町の外にいたときには牛や豚や鶏や魚で、生きていた存在だっていう事がなかなか子供たち

にはわかりにくくなっているので、命と向き合うってことも大事だなと思ったりもします。

そして最後にこれは私だけじゃなくてうちの親父の会もそうなんですけど、子供と一緒にをつくったりしながら、壊れたらゴミとして出してしまうんじゃなくて、あ、これは直したら使えそうだねということで直しながら使っていくということでの私の大工さんとしての仕事を皆さんに知っていただくということです。

短い時間なので十分わかるような写真になってないかもしれませんが、写真を見て、提案とさせていただきたいと思いますのでよろしくお願いします。

〈司会〉・前副知事の大槻さんに、大好きな森の話をしていただきます。よろしくお願いします。

千葉県副知事　大槻幸一郎
　ご紹介いただきました大槻です。
今日は千葉の森林の現状と里山条例を制定した後の状況がどうなっているのかという事をお話します。それにしても皆さん、非常にプレゼンテーションが上手なのでびっくりしました。まさか歌まで出てくるは思いませんでした。私は、この一月間ちょっと思いがけない日々を過ごさせていただきました関係もあり、今日のプレゼンにはパワーポイントを使いません。申し訳ありませんが口頭でお話させていただくことをお許しいただきたいと思います。

まず、今回のように里山を考える時に、里山の現状というのはどうなっているのかということをよく聞かれます。私どもが森林ということを外部の方にご説明する時に、林業という生産業を意識した統計資料というのが普通使われています。
例えば森林率だとか人工林率、人工林と天然林、そして山の手入れとして、間伐などがどうなっているかということがよく山の現状ということの資料に提供されています。
しかし、今回これほど分科会が多くなりますと、公の世界で皆さんに提供するデータ、資料のあり方というものをもう一回見直さなきゃいかんかなと思われます。例えば文化論としての里山の資料にどんなデータがあるのかなとかです。
そう考えると一体どうかな、と不安に思ったんですが、今日申し上げますのはあくまでもオーソドックスな、よくいう林業的視点での里山の現状といったものを簡単にお話したいと思います。
千葉県の県土に占める森林の割合は、30 パーセント程度とよくいいます。さきほどパワーポイントに出ておりましたが、全国では約 68 パーセント前後が森林でございます。
そういう視点から見ると半分以下ですので千葉県の森林というのは非常に少ない、そういう意味でそれをもっと大事にしないといかんということが相対的な価値観としてご理解いただきたいと思います。この 33 パーセント少々といのは下から数えて全国 47 番目、最下位ですから、非常に低いというふうにご理解いただきたいと思います。
関東近辺を見ますと、茨城、埼玉ともに 32 パーセント、ちょっと千葉よりいいのですが、意外なのは東京都が 36 パーセント、4 割近い林野率をもっております。多分皆さんも奥多摩とか、行かれた経験あると思いますが、ああいうところの山の割合が東京都の全体の林野率の引き上げに寄与しているんじゃないかと思います。それと人の造った人工林、人が人工的に杉や桧なんかを植えたものを人工林と呼んでいますが、千葉県の森林の中で約 4 割近い数字がこの人工林です。この数字は, 全国平均が 41 パーセントですので、だいたい全国並みです。
全国的にみて非常に人工林率が高いのが、九州の佐賀県、ちょっと嫌がられるかもしれませんが、これが 66 パーセント、7 割近い人工林でして、山を見るとい

たるところ杉・桧の木に代わってるなという印象です。それに比べますと千葉県、ほぼ全国平均だというふうにご理解いただきたいと思います。

今申し上げたような森林の姿、これをどういうふうにこれから表現するか、木材生産事業の切り口、文化論があったり教育があったり、それと健康問題なんていうことを意識した時にこの森林の姿をどう、指標化するかというのが、これからの行政の課題だと思います。

ところで森の手入れの状況なんですが、人工林というのは植えられた以上、人手をかけないとだめな宿命を背負っております。同一の遺伝子をもったクローンの林はお互いに競争の中で相手を倒すという力がどうしても弱いという特性を持っております。したがって人手で木の伸びる空間を作るために間切ってやるという作業がどうしても必要となってまいりますが、県の持っているデータを見ますと、計画を100としますと実行されておりますのはだいたい半分程度の、人工林に対する間伐の実行状況です。次に山の所有範囲があいまいというのがひとつの支障になっております。

今日御参加の皆さん、ボランティア活動なんかで自分の所有してない山に入ったりするケースが非常に多いと思いますが、その山の所有範囲がしっかりと確定しているかというと、千葉県の場合は個人の持っている山のほぼ一割が境界確定していればいいかな、という程度なんですね。

これは昭和２６年から、国土調査法により毎年計画的に土地所有の境界をずっと測量していく、そういう事業が行われておりますけれども、千葉県は全国の中でも低い、12パーセント位しか測量が出来ていません。私は昭和45年に社会人となりました。この頃と今とを比較しますと、いかに林業が苦しいかがわかります。

木材の消費量が、昭和45年ころだと一億立方メートルちょっとで国民一人が一立方メートルというところです。それが平成14年で、8,800万立方メートルとなります。木材消費量が減っている中で、木材の外国から入ってきている状況というのが大問題で、国内の杉・桧などによる自給率が昭和45年度には45%だったのが、平成十四年では18パーセントまで下がっています。

大卒の初任給が昭和45年当時37,000円くらいで、今は20万円近く、それを杉に置き換えて見ますと昭和45年には杉14本分だったのが今は210本分だということになります。人件費の高騰と木材価格の下落で日本の林業は全国的に壊滅状態にあります。

そのなかで山の管理をボランティアやNPOのみなさんの力を借りてやっていこうということで、里山協定を制定したのが平成16年5月18日です。山を持っている方、それとボランティア、NPOの皆さんとの共同作業でできたのが里山条例です。現在、38の協定があり32の活動団体ががんばっていただいてます。

ごく最近、4月になりますが船橋において、県の協定に基づく小規模な里山の整備というレベルを飛び越えまして、30ヘクタール以上の大規模な里山をＮＰＯが整備する計画が始まりました。これは国から全国の市町村まで、いろんな森林計画が上からつながっているんですが、ちょっと個人では手に負えない規模で、5年間の計画を立てて、市町村長に認定をもらうと国からの補助とか、税制上相続税の優遇措置もあるという計画が船橋ではじめてできました。県に認定されております、里山整備協定の認可団体２つがタッグを組みまして、以前森林組合の持っていた山をまかせてくれということで90ヘクタールの大規模な森林を5ヵ年で計画的に整備していくという新しい動きがあります。

その辺を紹介しておきまして、とりあえず私の概況説明に変えさせていただきたいと思います。

（司会）どうもありがとうございました。里山の荒廃が進んでいて、状況がどんどん変わっているというのが、今の大槻さんのお話でわかったかと思います。

さて、材木が非常に安くなったということで、森の手入れにかかる費用をどのように捻出するかというのが大きな課題だと思うのですが、やはり我孫子市などは、農業を営んでいる方というよりは、都市住民の方、お仕事をされているサラリーマンの方が多いと思うのですが、そういう都市住民にとっての緑の価値が今見直されているのではないかと思います。神奈川県、埼玉県などでは、森づくりのため、森の手入れのために、みんなで税金を払っていくということが提案されています。

兵庫県では確か今年から700円の森林環境税が実施されていくということですが、我孫子市さんは、このような森林環境保全についての財政的な予算措置においてはどのようにお考えなのか聞かせてください。

（福嶋さん）我孫子で最近やった取り組みの中で、市民債で古利根沼の保全をしていくというものを紹介します。　古利根沼というのは利根川の昔のものすごくいい自然の残っているところなんですが、バブルの頃に何度か開発計画が出されたところなのです。そういった中で市民の声もあって守られてきた自然なんです。バブルの頃は50～60億円と言われていましたが、今は通常の価格になりましたので、我孫子市が保全のために約４億で買取りました。そのうち2億円は市民債を発行して市民に買ってもらいました。もちろん市民債ですから市民に返済するものなんですが、そういう形をとりました。

正式にはミニ市場公募債というのですが、今７０くらいの市町で既に発行されていて、それらは国債の比率よりもちょっと高い比率にしているのです。というのは、国は地方自治体よりも信用があるし、国債の方が流通の幅も広いので、国よりも信用度の低い自治体は利子を高くしないといけないという理屈なんです。しかし市民債を発行するには債権を印刷したりなど、その辺の印刷機で印刷するわけにはいかないので、結構費用がかかってしまうのです。そういう費用も含めて、財政的にもメリットがあるように市民債を発行したら、国債よりも低い利率になってしまったのです。しかし国債よりも低い利率なんて金融商品として成り立たないと言われて、証券会社からは全て取り扱いを断られました。しかし千葉銀行さんは指定銀行ということもあり、つきあってもらって、なんとか発行することができました。

ただ果たして国債よりも低い利率の市民債が成立するのかどうか、ということで注目をされましたが、その結果は見事に2億円発行のところに10億円以上の申し込みがありました。人数にして1300人くらいからの申込みを頂き、抽選をして決めるということになりました。

ここでわかったのが、我孫子市民の身近な自然への

関心が非常に高いということです。また、国の方が信用度は強いというけれども、国債は何に使われるか分からないですよね。しかし市民債は古利根沼の自然を保全して子どもたちに残していくために使うという目的がはっきりしているので、市民の皆さんに協力して頂けたのだと思います。千葉銀行からは、市民債は利率が低いということを市民の皆さんにきちんと説明して下さい、千葉銀行の方へ騙されたと苦情がきても困るので、きちんと説明して下さいと言われたので、市の職員がその説明をしようとしたら、市民の大半の方々が、「私たちは利子が欲しくて市民債を買うのではない。古利根沼の自然を守るために少しでも協力したくて買うのだから、利率がどうこうという説明はいいです」とおっしゃったとのことなんです。市民の皆さんの自然を守っていこうという意識が高かった。

もう一つは今、国も地方も借金がものすごく多いのが問題になっています。我孫子市は他の市から比べると借金が非常に少ないというのが財政的に唯一いいところという市なのですが、市民債というのは、市民の皆さんにこの事業はいいものだ、やるべきだと思ってもらって初めて買って頂けるものなんですよね。市民の皆さんがこんな事業に借金するなんてとんでもないと思うような事業では買ってもらえないのです。

そういった意味では、市民の皆さんが市の借金に関心をもち、市債の発行を市民の皆さんがコントロールしていくきっかけになるのではないかな、と思っています。また、自治体独自の市民債のあり方を、市民の合意を得ながら産み出していく可能性を示したと思っています。

さらに、我孫子市は常設型の市民投票条例を制定していて、例えば環境を守るために環境税を設ける、ＹＥＳかＮＯかと市民投票で決めるということが将来できるようになれば、市民自治が本当に成熟したと言えるのかなと思っています。

（司会） ありがとうございます。もっともっと伺いたいところですが。それでは今の財源の確保というところで、宮城県の蕪栗沼での冬季湛水米に直接環支払い制度が適応されると新聞で読みましたので、その辺りについて呉地さんお話頂けますでしょうか。

（呉地さん） 環境直接支払い方法については政府が自然再生推進計画をつくって動き始めていますが、なかなかすぐに地域に溶け込んで行くようなものではないし、それを実行する前に受け皿をつくっておく必要があるという視点から動き、今までの農業から環境を生かした農業へと誘導していこうという取り組みを始めたところである。

私の来年は正式名称を忘れましたが、農林水産省の国の資金を受けて、ふゆみずたんぼ、無農薬、無化学肥料、冬に田んぼに水を張るという農法の取り組みをしている人には町の方から直接支援をしていこうという取り組みです。お金も少しは払うというもので、一反が 100 円、10a が 1 万円、行政がそういう支援をしています。一方で、減収のマイナスを減らしながらプラスを増やすと言う枠組みを作って農家の人に支援しています。

（司会） ありがとうございます。それでは先ほど鈴木さんの仕事を伺い、楽しそうでいいなと思ったんですが、いろいろお聞きするとご苦労も大変多いようです。

里山の遊びなどは、けがもあるかと存じます。いろいろな価値観をお持ちの親御さんがいらっしゃる中で、園としてどのように対応されているか、お話いただけますでしょうか？

（鈴木） 非常に多様な社会ですよね。だから、多様な価値観をもっていらっしゃる方の集まりなんだというのが大前提で付き合っていかないといけない時代なんだなと思うんですね。昔は、みんながそれでよし。一つの生活のスタイルなりルールに縛られた中でみんなわりと共通の縛られた中で、和を持っているというか協調性のなかでやってこれた時代だったですけど。

今は結婚観にしても違いますし、家族家庭感もそれぞれ違いますし、子どもと言うことに対しても育て方がいろいろあったりして多様な人がいるって言うことを前提に私たちも家庭とのお付き合いをしないといけないです。そういうときに、こういう子ども人もうちの保育園に入った以上はこういうやり方にしたがってほしいと言うやり方では、反発が来ることの方が多いんです。そうなので、そういうことに共感してくれる人から、「じゃ一緒にやってくれない」って誘い込んでいく、ということを出発点にして、仲間を少しづつ増やしていくことを。

そのなかで、何かを広がりで考えるとやはり一番の力は子どもが生き生きと遊んでいる生活している姿があるからこそ、あ、いいなとみんなが思ってあそこに自分も入っていこうかなと言う関係につながっていくんじゃないかなと思うんです。きれい事ではなくて、いろんな親御さんに出会います。つい前年度最後の方でも女の子がクラスのそのこが好きです。お父さんが保育園にやってきて、うちのこの顔に傷つけたら困る、いつもそんなことが無いように監視してもらわないといけないということをいってくる。うちらとしては、お父さんとしては、そこから先に進んでいかないので、私たちもできるだけ気をつけますんでお父さんご意見ください。

そういう中で子ども同士の関係のなかでこうゆう事遊んでるよ、そうゆう事教えてもらったよって伝えることでお父さんも、仲間がいて仲間で育てているということを感じると言うことなんですね。

そこでお父さんも気持ちが変わってきて。そういうときにまた傷つけると言うことが起きてしまって、お父さんが飛んできて、どうしてくれるんだという話になったときに、本当にすみませんでしたと謝るわけですけど、最後は、担任ががんばったんですけど、謝ったりしながらいくら時間がかかっても、そういう風にしてもらうといいんだけどいっちゃうと簡単なんだけどそうじゃなくって一緒に作り上げながら一緒に考えていく関係を作っていけたらね。増やしていくっていうことが必要なのかなと思っています。

里山文化って言う大人が効率化を求めた結果がゆとりの無い状態を作っていって最後には事故につながっていくってことがあってそういう社会はダメだなて言うことを本とはみんな気づかないといけないかなと思うんですね。

そういうときに新しい生活分野としての里山というものを一緒に増やして作っていく新しい文化を丁寧に関心のある人から広げていくことを地道に広げてやっていくという時代がきているのかなと思います。

（司会）ありがとうございます。最後に大槻さん。先ほどは、お仕事上の話をしていただきましたが、今度は大好きな里山に寄せる思いを１人の県民としてご発言いただけませんでしょうか。

（大槻）それでは、ここで、信濃毎日新聞の５月５日の社説「こどもの日に」の一部をご紹介したいと思います。
　ちょっと抜粋して読みますね。

遊びの世界に旅させよう
かわいい子には旅をさせよ、と言います。甘やかさないで厳しいことやつらいことも体験させなさい、といった意味です。　言葉通りに、わが子を旅に出すと受け取ってもいいでしょう。旅には危険も伴います。それでも子どもを少し突き放し、信じて待つしかの、親の心構えも込められています。
　いつ犯罪や事故に巻き込まれるか分からない時代です．すみずみまで目配りしないと、心配になるのも無理がありません。
　だからこそ、子どもには自由に旅をさせたいと思うのです。安心してください。列車やバスの旅ではありません。「子どもが本来持っている世界への旅」のことです。
　孤独で、だれも助けてくれないときに、何が支えとなるでしょうか。家族の一言，友の励まし、先輩の助言は大事です。
　それ以上に大切なのが、本人の内面の力です．幼いころに自然や友達と遊んだ経験、話してもらった物語、それらを通じて培った勇気や試練に耐える心が、自分自身を励ましてくれるのです。
　それこそが子どもの世界に子ども自身が旅することの意味にほかなりません。・・・

（小西）大槻さん、どうもありがとうございました。本人の内面の力が大切で、それは困難にぶち当たった時自分を助けてくれるものだ、そしてその内面の力は、遊びを通じて培われていくものだということですが、大変重みのあることだと思います。
　パネルディスカッションの冒頭に、里山の保全に必要なのは、新しい地域力「ちから」であり、それは活動の中での人づくり、関係づくりではないだろうかと申し上げましたが、一人ひとりの力とそれら同士のネットワークが今後の里山の保全をすすめていくちからになるのだと思います。
本日は様々な分野でご活躍の皆様にパネラーとしてご出席いただきお話しを伺いました。今後の私たちの里山保全活動に多くのヒントをいただいたと思います。パネラーの皆様、本日は誠にありがとうございました。会場の皆様、もう一度盛大な拍手をお願いいたします。本日はどうもありがとうございました。

メモ覧

我孫子市全体会会場写真
我孫子市の皆様、中央学院大学、我孫子市岡発戸・都部谷津ミュージアムの会の皆さま方に大変お世話様になりました。ありがとうございました。

中央学院大学６号館

打ち上げ会場

第２回ちば里山フェスティバル「里山シンポジウム」報告書
２００６年２月２０日　　改訂第２版

発行：里山シンポジウム実行委員会・我孫子市
ちば里山センター・(社)千葉緑化推進委員会・千葉県

編集：里山シンポジウム実行委員会
編集担当：荒尾 稔、中村俊彦、川上寿子、木山陽士、白木康平
印刷：株式会社 トータルメディア研究所
113-0021　東京都文京区本駒込 4-38-1-505
Tel. 03-3824-6071　Fax. 03-3824-5980
E-mail:tmlarao@tml.co.jp　ＨＰ:http://www.tml.co.jp

里山での子どもたち　　田中正彦　撮影

里山の春

里山の夏

里山の秋

里山の冬

浅井粂男　画

20060316100